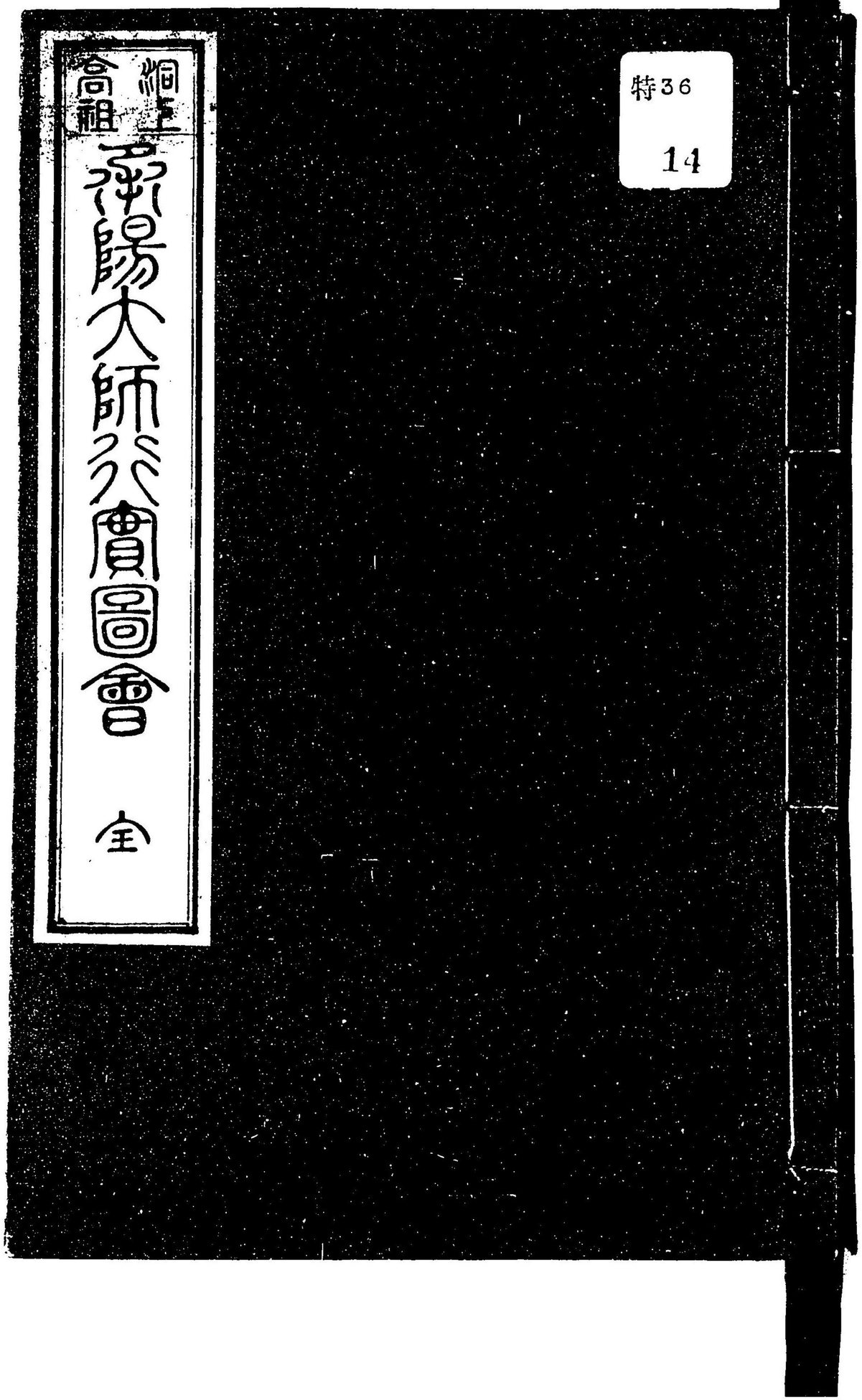


019431-000-9

特36－14

高祖承陽大師行実図会

宝山　梵成／編

M26. 9

ABG－0140

遠孫比丘寶山梵成編輯

涼陽大師 [illegible]

東京書肆

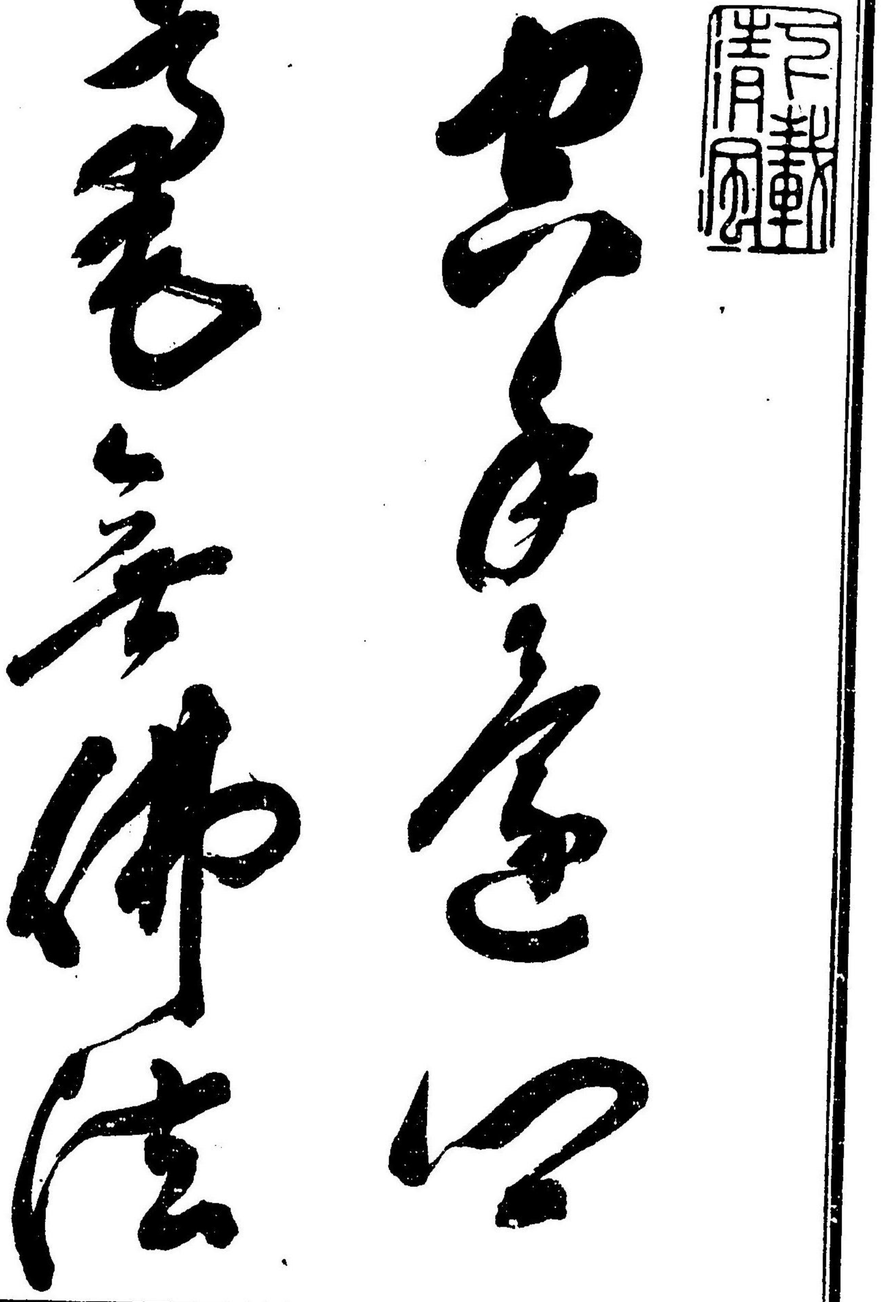
森江出版

特36
14

永平有箇單傳句
雪裡棲花綻一枝
中下多間多不倍
上乘菩薩倍無疑

眼橫鼻直
正令全提

法孫北丘敬題



高祖承陽大師行實圖會

目次

發端之小辭
并 高祖大師御系圖の事
高祖大師御誕生の事
附 天性御發明ある事
御母公御逝去の事
附 世間の無常を觀じて求法の大願を發したまふ事
出家の素懷を遂させたまふ事

教中の深理を精く御研究あらせらるゝ事
　附建仁の榮西禪師ふ初て相見したまふ事
渡宋求法の事
宋帝ふ訴て法臘の順序を正したまふ事
初て天童如淨大禪師ふ見へたまふ事
宗門の嗣書を拜覽まして深く希有の感を發したまふ事
偏く諸方の善知識に參見したまふ事
　附明全和尚御入寂の事
菩提の妙道を究盡して出世の本懷を遂させたまふ事
大師の拋たまへる拄杖忽ち龍と化して猛虎を追退ける事
稻荷明神靈藥を授けて大師の御一命を救ひたまふに淨祖より慇懃の御付囑ありし事
　附碧巖集全部を一夜の内ふ寫したまふ事
天童淨祖ふ瞰を乞ひたまふに淨祖より慇懃の御付囑ありし事
　附碧巖集全部を一夜の内ふ寫したまふ事
御皈朝の節觀音大士の冥護ふ依て風波の厄難を免れたまふ事

最初に興聖寺を御創立ありて熾に大法を擧揚し
たまふ事
近衛殿に於て御法談の事
大師の御道德まほ〳〵顯きたまふ事
佛祖正傳の血脉を以て遙に亡靈の冥苦を救はせ
たまふ事
波多野雲州義重の招請に赴きたまふ事
越前國に赴たまひて永平寺を御開創ありし事
天華彩雲などの奇瑞を感ぜさせたまふ事
鎌倉府の懇請に赴きたまふ事

附寺祿等を堅く辭したまふ事
羅漢尊者を御供養ありしに尊者おの〳〵現はき
たまふ事
朝廷より特に勅使を立させらきて紫衣を賜はる
事
御病中に八大人覺を教示したまふ事
御療治の爲に京都へ上りたまふ事
御入滅の事
御諡號の事
以上

高祖承陽大師行實圖會

法孫比丘　佛鑑梵成編輯

發端之小辭

高祖大師御系圖の事

謹で按ずるに大乘妙經に諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世と説たまへり今我が宗祖大師の世に出たまふも亦是を一切衆生に佛知見を開示して佛境界に悟入せしむる一大事因緣の爲め外あきことにぞありける蓋し其の應身の靈德神妙寂通甚深廣大にして不可説不可思議の蘊奥に至ては豈に庸愚の

窺ひ知るべき所あらんや假令千萬巻の書を著して其の事蹟を説くも亦た究盡すこと能はず況や僅か一小冊を以て大師御一代の洪德の萬分一をも述る事を得んや然りと雖ども今且く書肆の需に應じて諸書を折衷し聊か其の槩略を記して初心の信徒童蒙婦女等に其の一分を知らしめ倶に恩海の涓滴に酧ひ奉らんと欲する者あり抑吾大日本國曹洞宗の高祖なる越前國吉祥山永平禪寺開山佛性傳東國師承陽大師道元大和尚ハ實に是れ釋迦牟尼如來より第五十一代に當らせたまふ嫡嗣正傳の祖師にてぞ

ましく〳〵けるが爰に先づ御出現の迹を原ね奉るに其の御系譜を畏くも人皇六十二代村上天皇九世の孫にて則ち久我内大臣源通親公の御三男に當らせたまふ御母公は大織冠鎌足公十八代松殿關白太政大臣藤原基房公の御息女あり其御系圖左の如し

御父方御系圖

○村上天皇 人皇六十二代 ― 具平親王 二品中務卿 世称后中書王 ― 師房 從一位太政大臣 寛仁四年始賜源姓

顯房 從一位右大臣 ― 雅實 從一位太政大臣 久我家之祖 ― 雅定 右大臣 ― 雅通 從一位太政大臣

通親 内大臣 ― 通光 太政大臣 ― 通忠 大納言右大將

承陽大師

御母方御系圖

○大織冠鎌足 内大臣 始賜藤原姓 不比等 右大臣贈太政大臣 房前 參議従三位贈太政大臣 眞楯 大納言正三位贈太政大臣 内麿 近衛大將右大臣贈太政大臣

冬嗣 正二位左大將右大臣 良房 太政大臣攝政准后 基經 太政大臣攝政准后

忠平 太政大臣關白准后 師輔 右大臣正二位右大將 兼家 攝政關白准后

道長 太政大臣攝政准后 頼通 太政大臣關白 師實 太政大臣關白 師通 關白内大臣

忠實 太政大臣關白 忠通 太政大臣關白

基實 攝政關白右大臣 近衛家之祖

基房 太政大臣攝政關白 称松殿

兼實 關白従一位右大臣 九條家之祖

師家 内大臣 亦称松殿 法眼

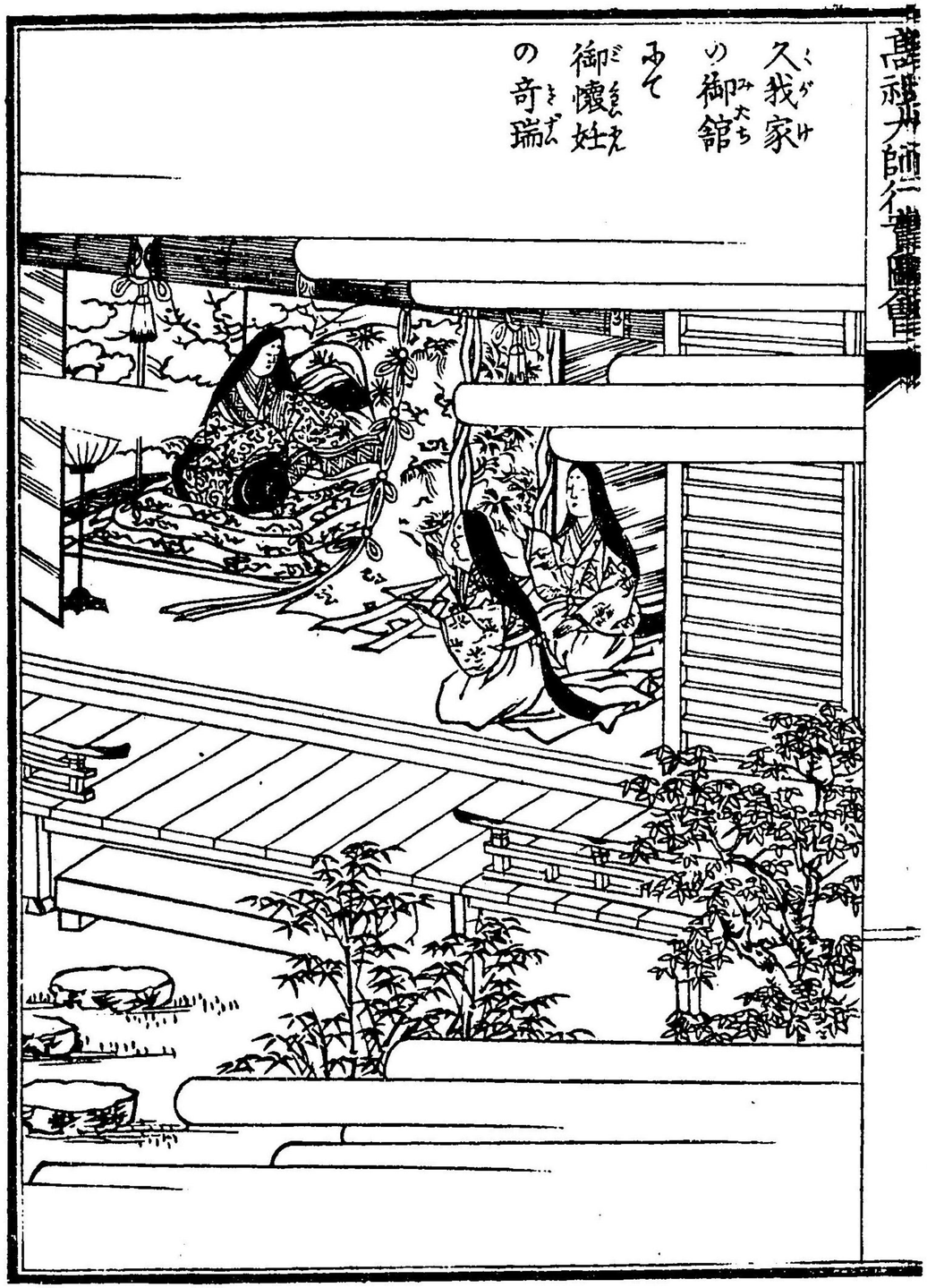
良觀

女子 即大師御母也

高祖大師御誕生の事

附天性御發明ある事

人皇八十三代土御門天皇の御宇正治二年庚申正月二日に大師御誕生ましましけり初め御母公御懷妊の時彩雲空にたなびきて此兒は五百年以來肩を齊ぶる者なき大聖人にて今ま日本國に正法を興隆せんが爲に生るゝなりと告る聲ありさまざ大師の常人にましまさゞることと推して知るべし亦た相者あり熟と大師の相好を視て此の兒は尋常の童兒に異なり必ず是れ聖人なるべし七處平滿して骨相奇に


久我家の御館にて御懐妊の奇瑞

秀で眼に重瞳あれば是を決して凡夫にてはましま
さぬと深く稱歎せり建仁三年は大師甫て四歳にな
らせたまふが李嶠が百詠を讀たまへり此の書ハ上
下二巻にて百二十首の詩を集めたる者なるが僅か
四歳にして之を諳誦たまふとハ誠に抜群の俊才な
らぬや之に依て耆老名儒も大に讃て云く是れ凡庸
の類にあらぬ後來必ず大器たるべし眞の神童なり
と歎美して已ぬされば建永元年御齢七歳にして早
や毛詩左傳を讀たまひしが是より凡そ一切の經史
を閲たまふに師訓に由らぬして自ら能く通曉した

まふなど實に古今にも比類稀なる御事なり

御母公御逝去の事

附 世間の無常を觀じて求法の大願を發した
まふ事

承元元年ハ大師も既に八歳に成らせたまふが其冬
御母公御逝去ありければ大師深く悲歎の涙に沉ま
せたまひ終夜その御枕邊に坐せしが燒ぬる香の煙
が起てゝ頓て滅る景況をば熟と觀そなハして密に
無常の道理を悟り世間の果敢なきことと總て皆この
煙に異ならぬを何事にか執著して徒に浮世の榮花

を貪るべき早く出家得道して無上菩提の悟を開き此世を過させたまひし両親を始め生死に彷徨ふ一切衆生をも濟度せんとの大願心を發したまひしこそ最と尊くも亦た難有けきされバ其の翌年九歳の御時より世親菩薩の倶舎論を讀たまひ其他内外の典籍に渉りて御學問怠らせたまはず晝夜意を勵して若し眠の萌を時にハ針を以て股を刺など專ら古人の跡を慕ひて異念なく勤めたまひけきを日に其道に進ませたまふこと迥に諸人に超たまへり時の人こきを見て誠に利根發明あること文殊の如しと

稱讃せぬ者ぞなかりける爰に御母公の兄君に當らせたまふ松殿攝政關白師家公とて天下に雙なき博識多才の人なりしがつら〳〵思召す樣は我も幸ひ良姪をもちたれば養て我子となし國の切要を教へ家の大事を授て追々關白の重職をも繼しめばやと密議せられるを大師ひそかに窺ひ聞たまひ中々にうるさくぞ思召されるとあん

出家の素懷を遂させたまふ事

大師朝夕御心の内に世の冨榮は我が望む所にあらば如何にもして出家學道せばやと御誓願の御志し

益は堅く建暦二年則ち十二歳の春或夜ひそかに都を忍出で叡山の麓におはせは良觀法眼ハ御母公の御兄にてましませず其の許に到り切に出家を請ひ求めたまひしかバ法眼大に驚きたまひ我も兼て聞しが近き内にハ松殿の御養子とせらるゝ其跡をも嗣しめたまはんとの御事あり然るを今出家したまひなば定て其の御憤あるべし先づ暫く思ひ止りたまへと懇に諭さるを打消したまひて曰ふ様は悲母の遺囑に汝相構て出家學道して我が後世を弔ふべしと特に亦た我心にも浮世の榮花など聊か願ふ所に非ずとて發心の御志し堅固にましませず法眼も聞て感涙を流したまひやがて横川首楞嚴院の千光房へぞ登せける其翌建保元年御齢十四歳の四月九日天台の座主公圓僧正に就て得度を受け同く十日に叡山の戒壇に於て菩薩戒を受たまひぬ

教中の深理を精く御研究あらせらるゝ事

附建仁の榮西禪師に初て相見したまふ事

大師すでに得度受戒の御儀式も濟せられけるを大に喜びたまひ是より日夜懈怠りなく天台八教の學問を勿論廣く諸の經論を渉獵して精く其の深理を

探りたまひしが其の翌年建保二年十五歲の御時ゟ
一の御疑をぞ發したまひける其ハ顯密二教ともゟ
談ずる所を本來本法性天然自性身とあるが若し此
の如くあらば我等一切衆生の身が其身そのまゝ天
然の佛あるべし若一切衆生が生まれた儘で直に佛
でけるあらば三世の諸佛方ハ何として發心修行あさ
まして更ゟ佛果菩提を求めたまひしぞとの御疑あり
之を一山の耆宿に質問したまふに確と答釋する人
ゟし其頃三井寺の公胤僧正を天下に比類あき學匠
なり特ゟ觀心の法門に精しと聞たまひて急き往て

此の義を問ひたまひしに僧正頭を傾けたまひ夫れ此の問を輙く答ふべきことにあらず昔より宗義もある事あれど恐くハ其の理を盡さゞらん承るに建仁寺の榮西禪師を先年宋土より皈らせたまひて教外別傳の宗旨を弘めたまへり疾く往て問ひたまふぞ然るべきと諭されけれどそれより直に建仁寺に到りたまひ初て榮西禪師に相見して本來本法性天然自性身あらず什麼としてか三世の諸佛を發心して道を成ずたまふやと問せらるゝに禪師の御答に三世諸佛有ることを知らず狸奴白牯却て有ること

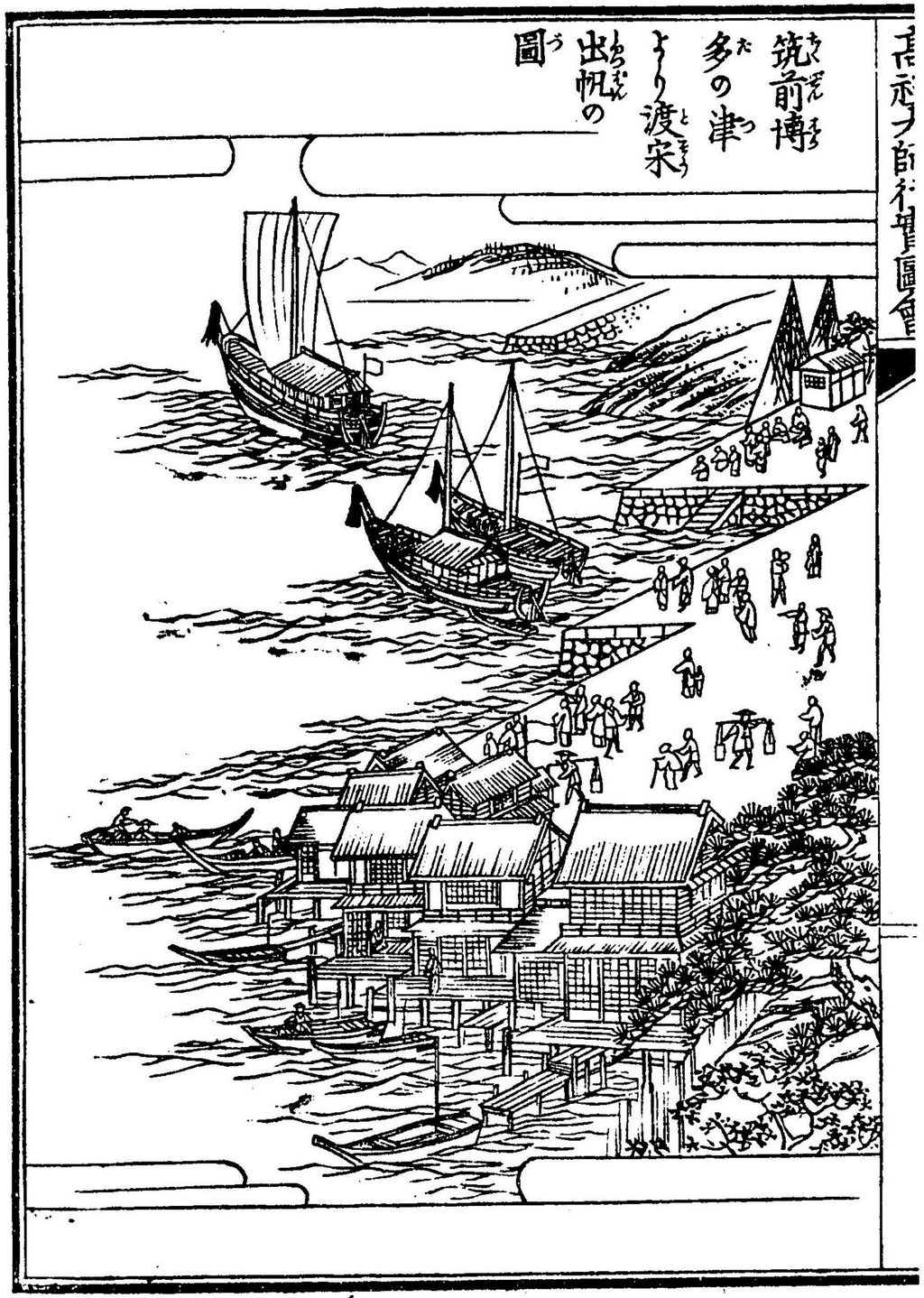
太師初て建仁寺の榮西禪師に御相見

を知とあるを大師是に於て服膺したまひて專ら禪法を學びたまひしが其の翌歳建保三年七月五日榮西禪師入寂したまひぬ乃ち大師十六歳の御時なり大に嘆かせたまひ夫より其の御法嗣の明全和尚に隨侍したまひて益を坐禪辨道に心を勵し且つ其の餘暇を以て一切經をも二度まで閲讀たまひしが光陰矢の如く既に九年の星霜を經たり時に大師ひそかに思召しける樣を迚も日本にては吾が師と頼む遣き人のおはさねば如何にもして宋土へ渡りて正師を得ばやと廣大の御志願をぞ發したまひ乃る

渡宋求法の事

貞應二年癸未の歳は大師までに廿四歳にならせたまふが此春明全和尚にハ渡宋の事を思召立せらきしうず是幸の事ありとて大に悦びたまひ乃ち二月廿二日に明全和尚に伴ひて京都を出立たまひ筑前の博多津に赴き三月下旬に商船に乗込たまひしが海上も至て穏なきバ順風に帆を揚げ四月の初に恙なく漢土明州の港に著たまひ乃り時に宋の寧宗皇帝嘉定十六年なり（即ち日本の貞應二年に當る）そもより暫が程は船中におはしまして諸寺諸山を巡り視て其の風俗

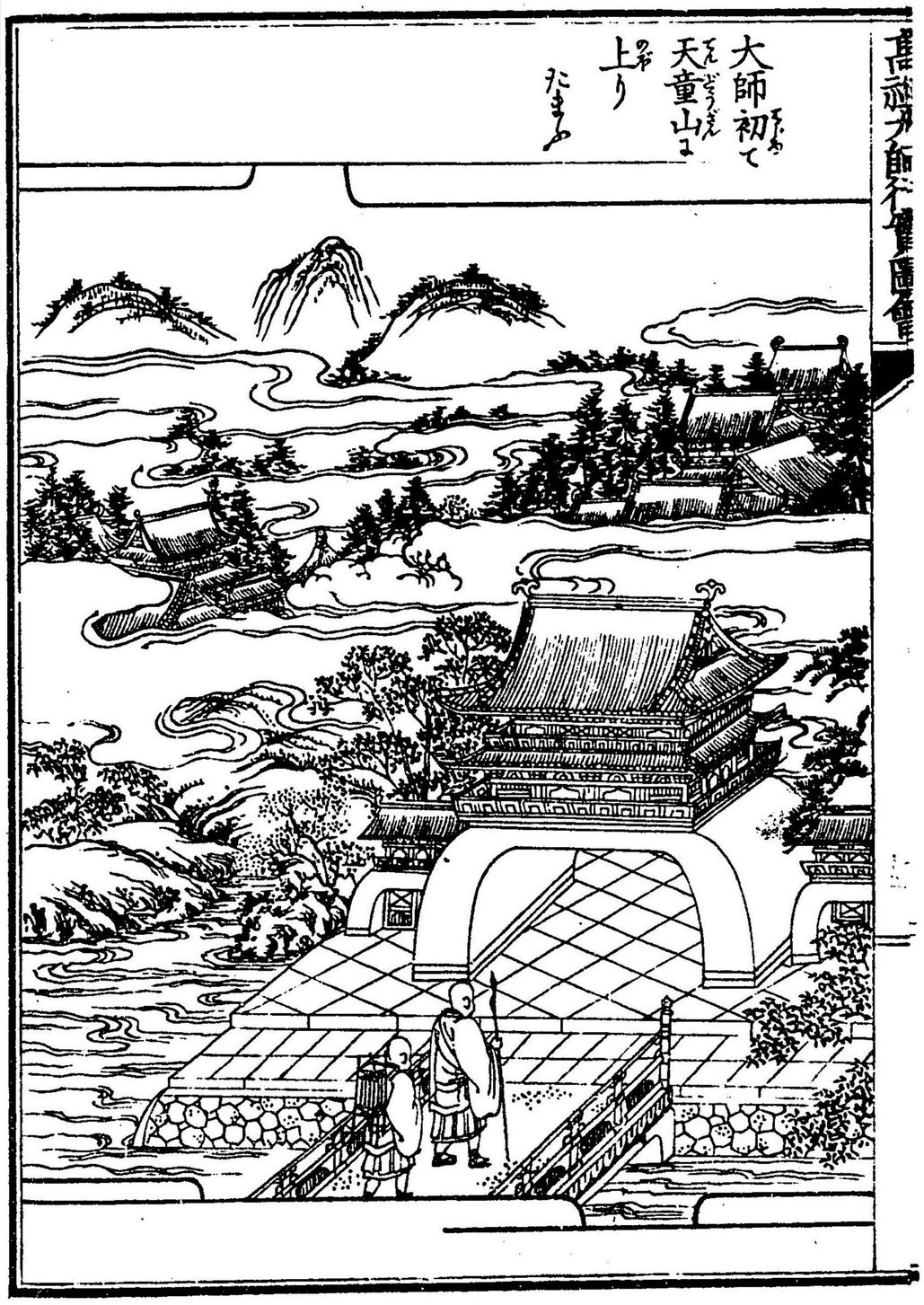
筑前博多の津より渡宋出帆の圖



を窺ひたまひけり

宋帝ゐ訴て法臘の順序を正したまふ事

其年七月遂ゐ天童山ゐ上て掛搭したまへり此時天童山ゐも無際了派禪師と云へる善知識の住職せらるゝ彼の國ゐても是まですべて外國の人といへバ之を賤みて新戒の列よ序るを例として大師のみあらバ明全和尚などい其年までに四十歳ゐも成らせたまへるをも皆ゐ唐僧の末席ゐ坐せしめけるを大師その法に違ける事を憤らせたまひ釋氏い法臘ゐ依てこ其座位をも定むゐ外國の人ありと


大師初て天童山に上り
たまふ

て猥りに末席に置きること甚だ以て心得がたし何とて之を正したまはぬやと詰りたまへども一山の大衆これを聞て前朝の日本より來まる僧の空海最澄及び榮西などの如きも皆な吾が中華の叢林に入る時は総て末座に列するが是れ舊例なりとて更に改める風情なりきを大師ひそかに歎息まし〳〵て噫千佛の規範の今や凡情に落ぬること深く悲むべし我これを正さゞらんやと乃ち上表して宋帝に訴へたまひけるに朝廷の僉議まち〳〵にして未だ勅裁なかりけるを更に再び表文を上り道理を盡して

訴へたまひければ寧宗皇帝これを覽そなはして大に叡感あらせられ遂に天童山に勅詔して法の如くに戒次を格定せしめたまへり其後日本の僧此彼國に到るに法臘座位の顛倒なきことは全く是れ大師の大功なりこれに仍て其の御名高く聞へて日本の國此光を遠く支那までも耀うしたまひぬるとて諸人深く稱歎せり

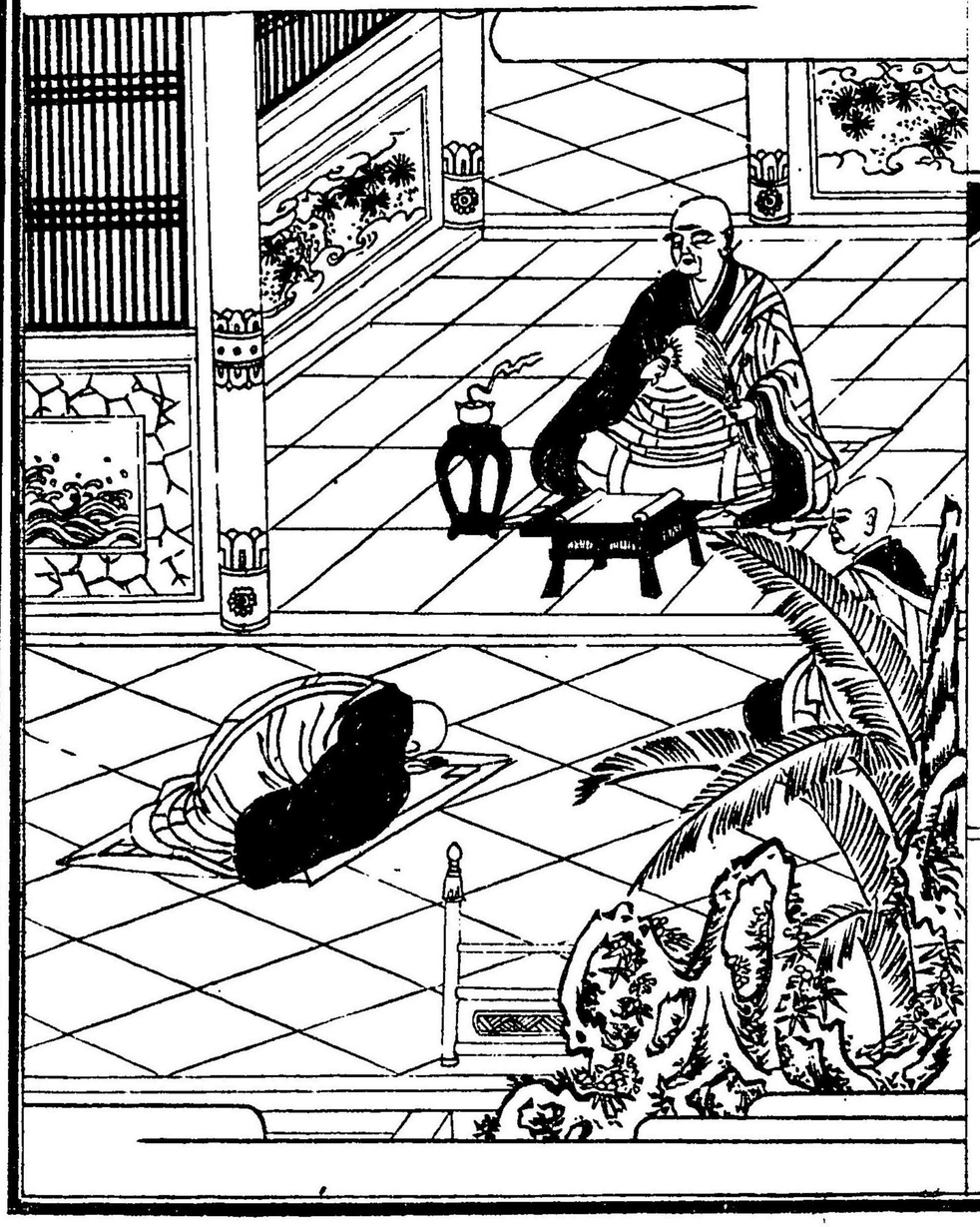
宗門の嗣書を拜覽ましくて深く希有の感想を發したまふ事

其頃兼て天童山に安居せる隆禪と云へる日本の僧

あり先に傳藏主といへる老宿の疾たまひし時隆禪心を盡して看病ありしかば藏主深く感ぜらき何がな以て其の勞を謝せんとて其の秘藏せられ乃る宗門の嗣書を取出して拜覽せしめらる今大師の求法の御志し最切なるを以て隆禪ねんごろに藏主に請て大師に見せまへらせ乃り大師また惟一西堂と云へる人に依て法眼下の嗣書を拜見したまひ宗月長老といへる人に依て雲門下の嗣書をも拜覽したまひ乃り扨この嗣書と申すハ其の本源釋迦牟尼如來より相傳へて直下廿八代の祖師達磨大師に至り初

て震旦に傳へたまひ一器の水を一器にうつせが如く代々に傳へ來て一滴も洩せことなき正法相承の血脉にて他宗他門にハ其名をだに聞くこと能はざる者なきバ大師も初て拜覽ましまして吾求法の爲に遠く宋土に來きだこれ斯る見難きものをも拜覽して正傳の佛法を見聞することを得たるなきとて深く喜びたまひ乃り其後又平田の萬年寺に到りたまふに時の住持は元鳳和尚とて有名の知識あり大師と御相見の因み出格の人なることを察せらき自ら起て嗣書を擎て申さるゝ樣ハこれは是きたとひ

萬年寺の元亨和尚に見へて嗣書を拜覽し香を焼て恭敬したまふ



如何なる親人なりと雖ども又年久しく吾に隨侍せる者と雖ども曾て之を見せしめばとも乃ち佛祖の法訓あり然るに吾さきごろ一夢を感ずるに大梅山の法常禪師とおぼしき高僧ありて梅花の一枝をさしなげて若しもでに船舷をこゆる實人あらば花を惜むことなかれと云ひて梅花を吾に與へたまへり今老兄もでに船舷跨來れり此の嗣書また梅花綾に書けり是れ必ず大梅の教る所ならん全く夢中と符合するゆへに取出して老兄に見せしむるなりと申されたり大師これを聞たまひて窃に思召す樣ハ實

徑山に登て如琰禪師に参見し
たまふ

に是も佛祖龍天の冥資にあらざれば容易く見聞せ
ること難かる事し今我も何の幸福ありてか數番も
ことを拜覽せることを得たりやと坐に感涙をぞ流
したまひける

偏く諸方の善知識に參見したまふ事

扨彼の宋土の寧宗皇帝ハ既に崩御させたまひて今
ハ理宗皇帝の寶慶元年（日本の嘉祿元年に當る）とありければ大
師ハ廿六歳にぞあらせたまひけるされば凡そ二年
が程天童山に寓止たまひて專ら參禪學道に力を勵
ましたまへば堂頭無際禪師より數回悟道の許可を

蒙りたまへども御自身ふてゝも尚こゝを足れりとし
たまふに遂ふ天童山を出て徑山に登り漸翁如琰禪
師ふ參見したまひ又台州の小翠岩ふ往て盤山思卓
禪師に參ふたまひ夫より再び育王山ふ上て成桂知
客を勘驗したまへり此の如く諸方の名山巨刹を遊
歷してひろゆる有名の善知識ふ參見したまへども
是ぞ吾が師範と頼むべき人もなけまだ再び天童山
ふ皈て無際禪師を訪ねばやと思召し立せらきしが
途中に於て禪師ハ既ふ入寂せらきりると聞て大に
嘆うせたまひそきより遂ふ日本へ還らんとの御心
萌したまへで兎ふ角も明全和尚にもまだ天童山ふ
御滞留の事と思へを先づ一應訪問申さんとて再び
彼の山をさしてぞ進ませたまひける

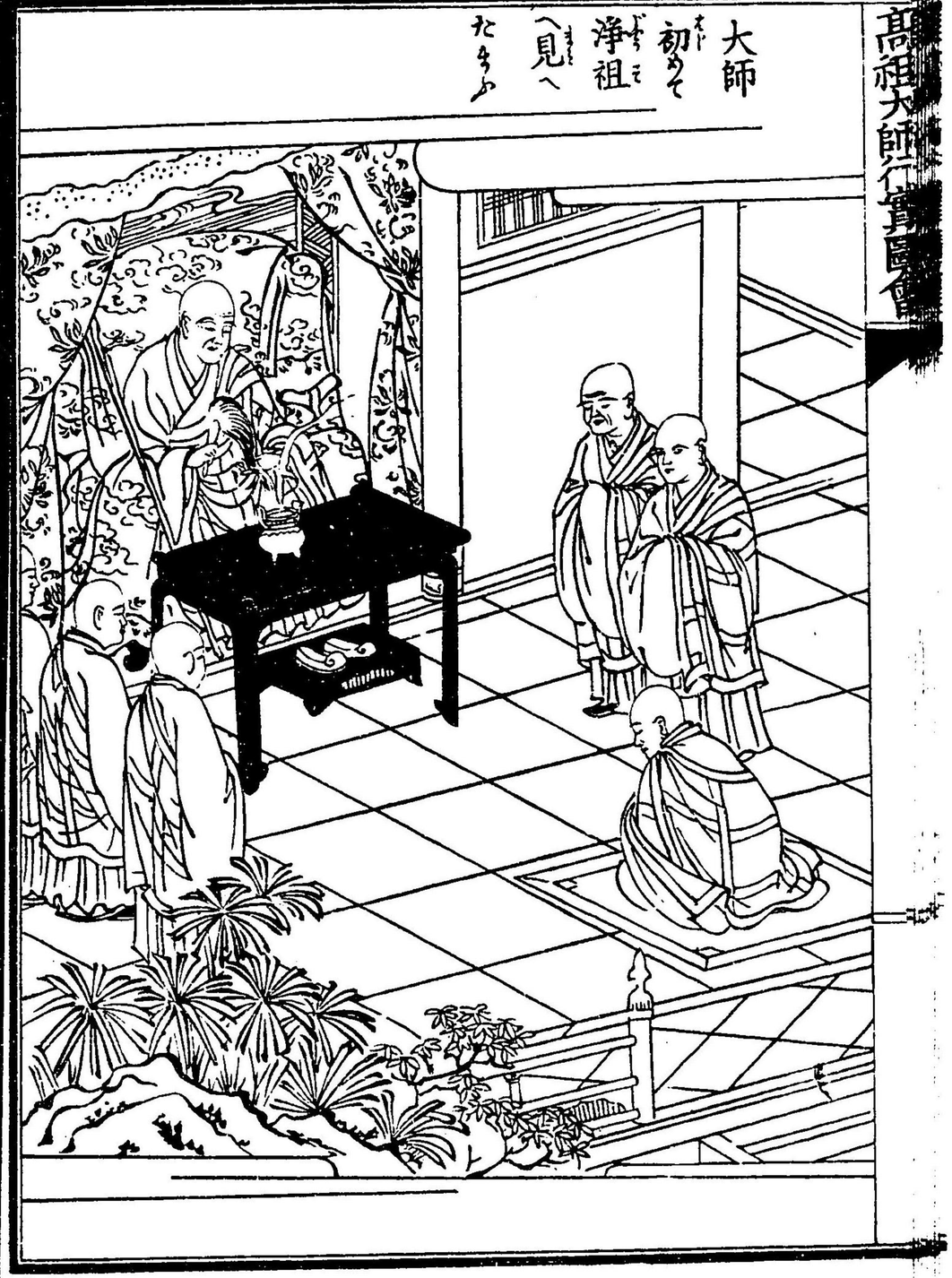
初て天童如淨大禪師ふ見へたまふ事

附明全和尚御入寂の事

さまで大師も天童山へとゝろざして赴きたまふ
折柄途中に於て老璡と云へる僧ふ遇たまへり此の老璡
と云へるハ羅漢の應現ありと申し傳へり乃ち大師ふ謂て云く此頃勅命
に依て天童山ふ移轉たまへる如淨禪師と申すハ天
下ふ雙あき大善知識ありと公ふそ求法の志し尤も切

ありと聞つきむ丘時も早く山に登て參見したまへ
と勸めらるれバ大師の御悦び一方あらず急ぎ天
童山へ登りて如淨大禪師ゐ見へたまひしに禪師直
ゐ告げ示して宣ふく佛々祖々面授の法門現成せり
と大師をゐも禮拜したまふ是れ實ゐ宋土の寶慶
元年乙酉五月一日の御事あり時ゐ淨祖左右の人ゐ
告て仰せらるゝ樣ハ吾れ昨夜洞山悟本大師を迎へ
奉ると夢みたり此の日本の僧とそ恐くハ是れ洞山
祖師の再生あらめ我が宗うあらバ此人ゐ遇て大ゐ
世に興らんとて深く喜ばせたまひ扨大師ハそ

淨祖一夜洞山祖師を迎へ奉ると瑞夢を感ゝたまふ



まより明全和尚を訪ひたまふに先つ頃より重き病
ふ罹りて了然寮ふ打臥したまひしが大師の來りた
まふを見て涙を溢して喜びたまへり然るに其疾ひ
頻りふ重り是月の七日ふ至り四十二歳を一期とし
て遂ふ示寂したまひぬ大師大ふ悲ひたまひ恭
しく火葬の法式を行ひ其の舍利を收拾めて懇懃ふ
供養したまひ乃ち是より親しく淨祖ふ參問して晝
夜怠りたまふことなくりき其の審細ある事い寶慶
記等ふ見へたまひて志あらん人い拜覽を遂て廣大の
恩德を知るべし

菩提の妙道を究盡して出世の本懷を遂させたまふ事

斯て大師ハ更に他事あらせらるゝ只偏に無上菩提の爲に御修行ましまして暫時の御油斷もなしたまはゞ日夜孜々としてまほ〳〵志を勵したまひけるが或日の事に同じ僧堂の内にて一の僧が坐睡せしをば淨祖見そなはし痛く之を責たまひて參禪は須く身心脱落なるべし只管に打睡して什麼を爲すにか堪んと宣ひけるを大師傍より聞たまひ豁然として菩提妙道の本源を悟り直に方丈に上て所解を

呈したまふに淨祖親しく印可したまへり大師をでに斯の如く佛祖の堂奥を究めたまひしかど其年の九月十八日に至て淨祖乃ち佛祖正傳の大戒を授けたまへり是れ實に釋迦牟尼世尊より嫡々相承して直下大師に至て五十一世正傳の一大事あり因て淨祖示して宣たく你求法の志操太だ深し吾が歡び喜ぶ所あり曹洞一宗の依托する所をおもち是れ你が身ありと懇に付囑したまへり是に於てか大師年來求法の素懷つひに滿足したまひぬ此乃ち一大事因縁の為に出世したまふと謂へる所以ありさまを御

皈朝の後は專ら此の法味を以て普く都鄙の道俗に施したまひたまを今我等粉骨碎身しても其の慈恩に酧ひ奉る所きものあり

大師の拋たまへる拄杖忽ち龍と化して猛虎を追退ける事

扨其後大師ハ江西あどに遊歷したまひけるが或日途中に於て日をでに暮あんとするに何くよりか其勢ひ最猛き虎かけ出來り牙を鼓して大師に向ひけるゆへ取敢ず拄杖を擲つけたまひしかど虎はその まゝ遁去りしと扨其の拄杖を彈虎の拄杖と稱して

江西に
御遊歷
の時
猛虎を
伏し
たまふ

其の彈
虎の拄
杖を今
現に
加賀國
大乘寺
にあり

今に至て現に加賀國大乘寺に秘藏せり然るに此の事蹟ハ大師御皈朝の後にも曾て人に向て語りたまひし事のあけまを世に知る人なかりしが御入寂の後に寒巖義尹禪師宋土へ渡りたまひし時所々の叢林にて龍の頭に僧の踞て其下に猛虎の拄杖を嚼む圖を畫て掛たるを見たまひて奇異の事に思召さき其の因縁を尋ねたまゝに答て云る様ハ這ハ先年日本より道元とか申す禪僧の來らきしが誠に希有の人あり或時江西の途中に於て日暮に及び不意に猛虎出來て既に嚼付かんとせしかば更にせんかたなく持たまへる拄杖を抛つけて傍の巖の上に身を避て坐せらきるに虎ハ其の拄杖に嚼付たりと見へしが忽ち跡をも見せず逃去りしゆへ巖を下て見られけきを巖にてあらで彼の抛つけらきし拄杖が龍と化したるあり其の頭上に安座せられし所を畫たるものあり餘り神妙不測の事ゆへに之を圖して尊崇せる譯であると語りしかば寒巖禪師も大に感じたまひて自ら其の圖を寫して皈朝したまひけるとぞ夫より日本にても普く人の知ることゝハ成きり寒巖禪師の自ら寫して持皈らきし一幅を今現に江

州大津の青龍寺に秘在せり却説その翌朝の黎明に一の童子あり懇に大師に告て曰く師早く日本に皈て直指單傳の祖道を唱へらるべし久しく茲に滯ると母きとありければ大師不思議に思召し卿は如何なる人ぞと問たまふに我は是れ韋駄天神ありと言訖て見へたまはず實に尊き御事なり

稲荷明神靈藥を授けて大師の御一命を救はせたまふ事

斯て大師は江西より御皈路の事にてやありけん深山を超へ廣野を過たまひし折柄身體甚だ困羸させ

稲荷神靈藥を授けて大師の急病を救ひたまふ

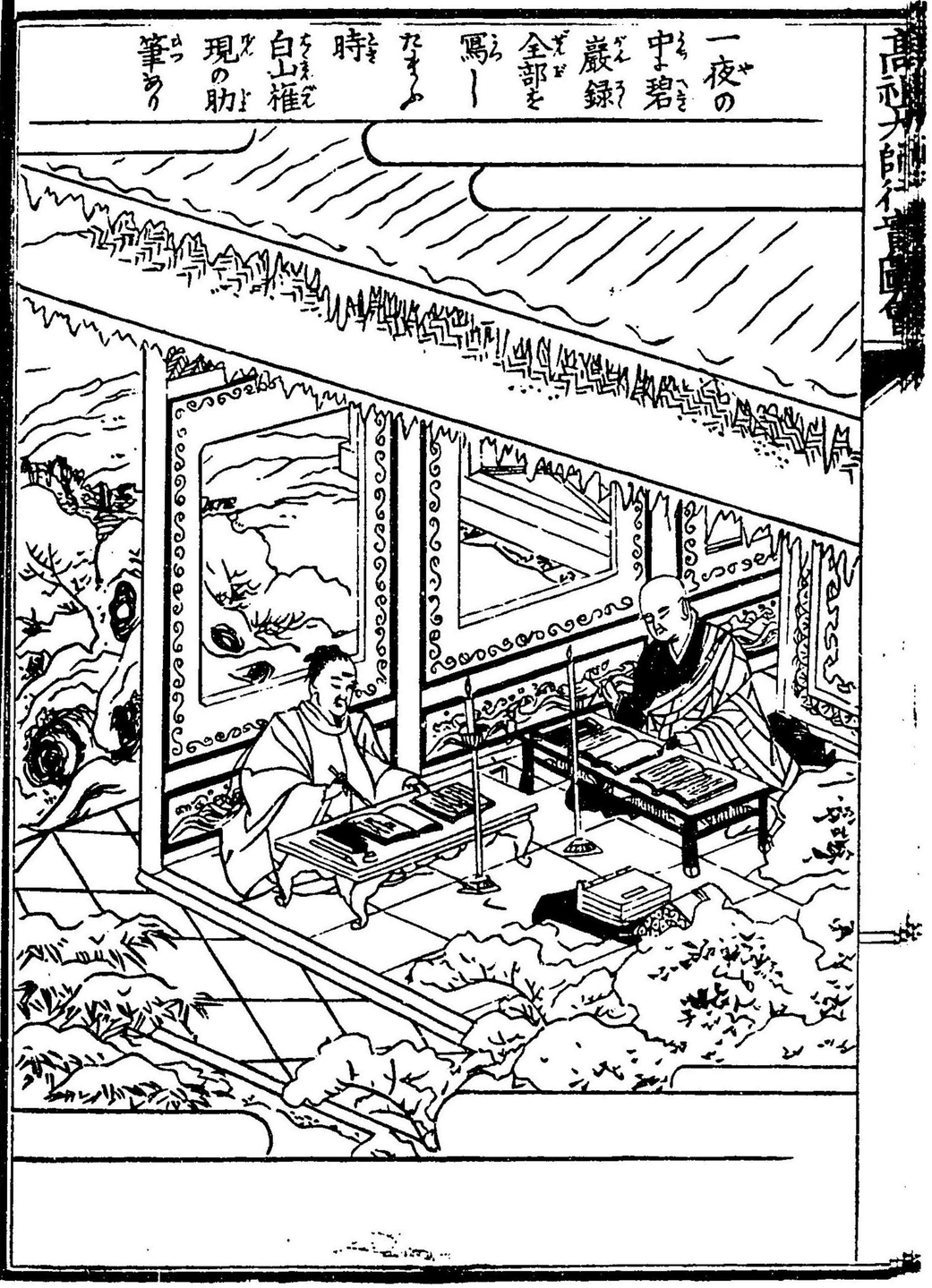
らは危ど死に至らんとしたまひ乃はまだ兼て御隨伴せられし道正ハ之を見て大に驚き人里遙に隔りたることなれば更に如何とも爲方なく只惘然として居たりしが忽ち白髮の老嫗現ちは出て一丸藥を與へたまひ乃り之を受て服したまふに其の病ひ卽時に愈させたまひしこそ實に不思議なる時に道正恭しく老嫗に向ひ御身ハ抑いかなる人にて斯る靈藥を授けたまひけるやと尋ければ吾ハ是れ日本の稻荷の神なり道元和尚の求法の志し特に深きを感じ常に其身を離れずして擁護たりしゆへ今乃ち其の急難を救ふありと告たまへり因て道正その藥方を傳ちり皈朝の後こはを世間に弘め乃ち名て神仙解毒萬病圓と云へる是なり

天童淨祖に暇を乞ひたまふに淨祖より慇懃の御付囑ありし事

附碧巖集全部を一夜の中に寫したまふ事

寶慶三年丁亥の冬に至り是より皈國せずやとて先づ淨祖に暇を乞ひたまひしかば淨祖乃ち其の夜半に入室せしめたまひて芙蓉楷祖より嫡々相傳せらはし法衣や寶鏡三昧及び五位顯訣とて宗門第一の

秘書あらびに御自賛の壽像あどを與へて親く囑したまふ様ハ汝ハ遥に日本遠國の人あれバ今こまを授けて信を表す國に皈らず廣く教化を布て人天を利濟せよ城邑聚落に住すること莫れ國王大臣に近くこと莫れ只深山幽谷に居して一箇半箇を接得して吾が宗を斷絶せしむること莫れと最懇に示したまひ乃まず大師限りあく喜ばせられ弥明日ハ打立んとて萬の支度を調ひたまひたる其日の薄暮に園悟禪師の碧巖録とて宗門に於て最も肝要ある書を見たまひ何卒して今夜中に寫し取りたきものとて



精神を盡したまひしかども何分にも全部百則十巻の書あまを全備し難きを心ひそうふ感をたまひるるが夜半の頃ふ至り忽ち白衣の神人來て助筆したまへりしかバ天明ふ至り全く其の功を終たまへり蓋し其の神人ハ乃ち加賀の白山權現ありしとや此の書を世に一夜碧巌と稱して今ふ加賀の大乘寺の室内ふ秘藏せり實ふ是れ無上の法寶あり護法の神慮亦た尊むべし仰ぐべし

御皈朝の節觀音大士の冥護ふ依て風波の厄難を免まぬかれたまふ事

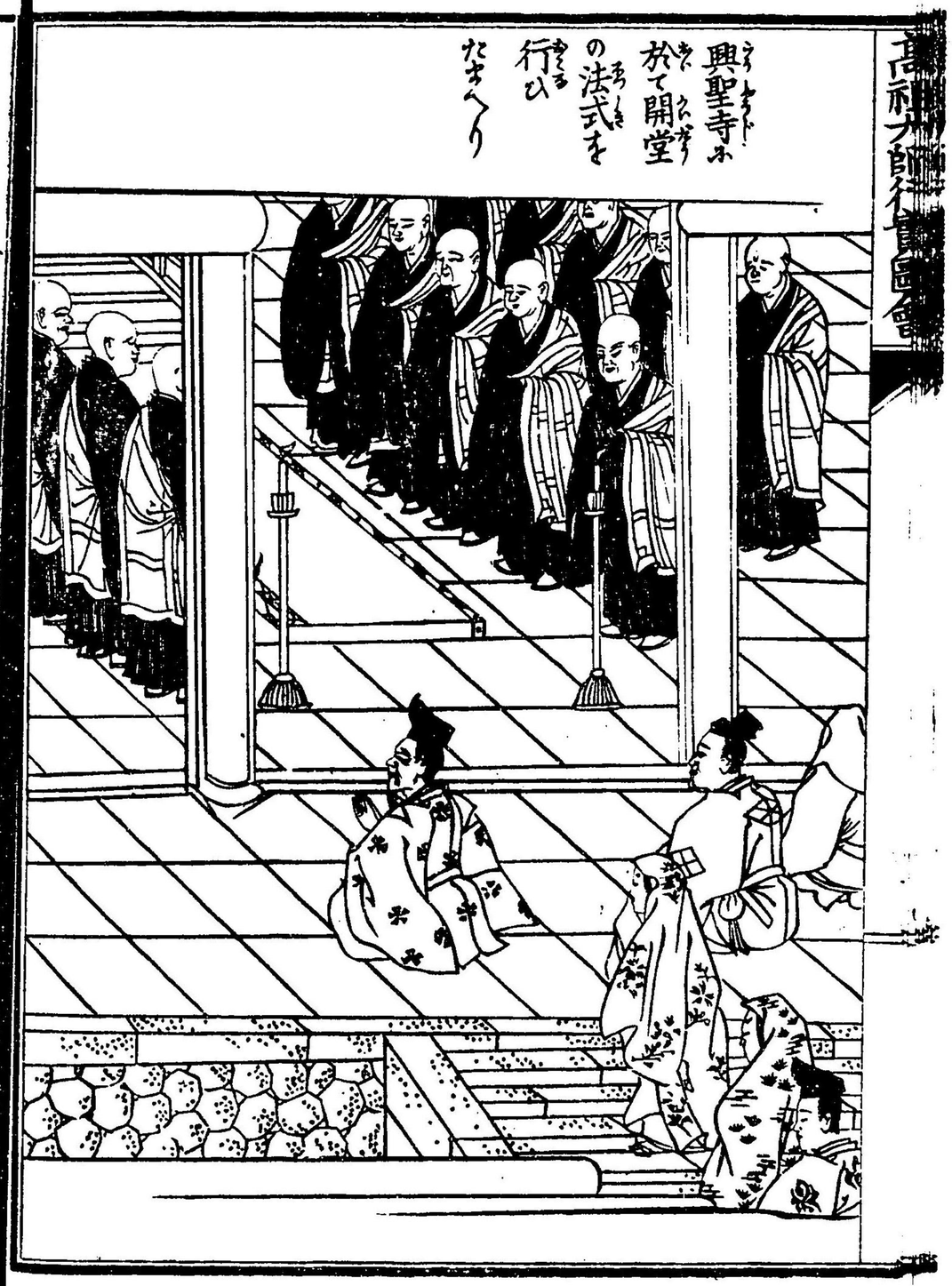
大師ハ夫より天童山を下り纜を解て宋土を發した
まひしが折節臘月の空此事あれど北風烈く吹起り
海上荒波高く騰り其の乗たまへる船も今は既に危
く見へはれど船師棹手を始め乗合の人々皆大に肝
を潰し其の狼狽一方あらば時に大師ハ船上に坐し
て一心に觀音普門品を念誦したまひしうバ忽ち菩
薩一葉の蓮花に乗せたまひて浪間に現ずきたまふ
と見へしが頓て風止み波收まりて其後ハ海面こと
に穏なりはれど翠年正月に恙なく肥後の川尻に著
たまひしハ最不思議にも亦た有がたかりし事ども

觀音大士海上の危難を救ひたまふ

あり今ま川尻ふ南溟山觀音寺と云へる寺あり一葉の觀音を本尊とせり是則ち大師の御著岸ふ時ふ海上みて觀ませたまひし御姿を自ら刻みて此處に安置したまひねと申傳へり其後監院の僧あり其の尊像を畫て大師ふ贊を乞ひしかば便ち其上に一花五葉開云々の五言四句を題したまへり監院遂ふ之を版ふ彫て廣く世ふ流布せり今ふ至て祖山より信徒等の懇望ふ任せ授與せらるゝもの是あり

最初ふ興聖寺を御創立ありて盛ふ大法を擧揚したまふ事

斯て大師を芽出たく御皈朝ませ直ふ京都ふ上り東山の建仁寺ふ寓止りて三年の星霜を經たまひけり扨その後ハ宇治郡深草の安養院と云へるに閑居したまひるが諸方その道名を聞て皈崇來參する出家在家の人々まさ多し之ふ因て大法擧揚の爲ふ其地ふ極樂寺と云へる寺の舊址ありしを取興さんとの御發願ありしかうて信心の男女淨財を抛て之を造營し未福元年癸巳の春ふ至て遂ふ落成ほ乃ち寺を興聖寶林寺と號けたまへり此時大師の御歳三十四あり此の前後ふ追々天台眞言等の碩德

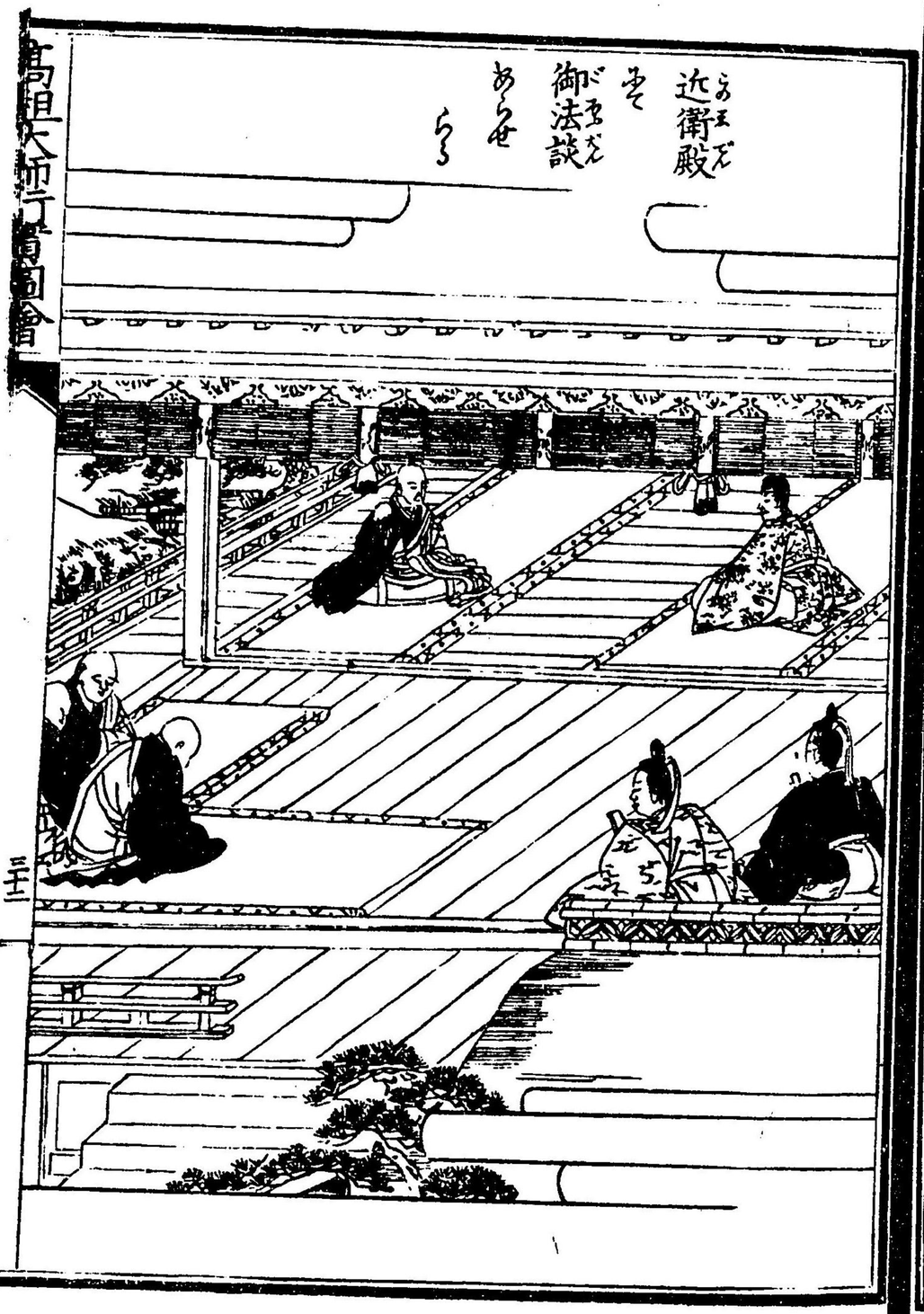

興聖寺に於て開堂の法式を行ひたまへり

も大師の道德を欽慕して衣を易て御弟子となる人其數亦た尠しとせば孤雲懷弉禪師を始として徹通義介禪師寒巖義尹禪師等乃ち是なりさまで嘉禎二年丙申大師三十七歳の御時なりしが其冬の初に興聖寺に於て開堂の法式を行ひたまへり十二月三十日に孤雲禪師を首座に請して秉拂を行はしめたまひけり是れ日本にて首座を立るの始めなり

近衛殿に於て御法談の事

仁治三年四月十二日の事とかや近衛殿の御招請に赴きたまひ御法談ありけるが因に近衛殿の問せた

まくる様は我朝にも先代より此の禪宗と云へる宗
旨の傳はり來ることもありしや如何にとありけれ
ば夫れ我朝に名と相とのみ此佛法の傳はり來るこ
とハ凡そ四百餘年にもなりぬれど真實の佛心宗の
流通は正に今日に當るなり神丹國にても後漢の明
帝の時に始て名と相とのみ此佛法は傳はりしが其
後四百餘年を經て梁の武帝の時に至り達磨大師渡
りたまひて直指單傳の正道を傳へられしより祖道
始て弘まりしなりされば我國も欽明天皇の御時に
始て佛法の名字のみ傳はりても未だ以心傳心の宗



匠あらざりしありと答へたまひけり

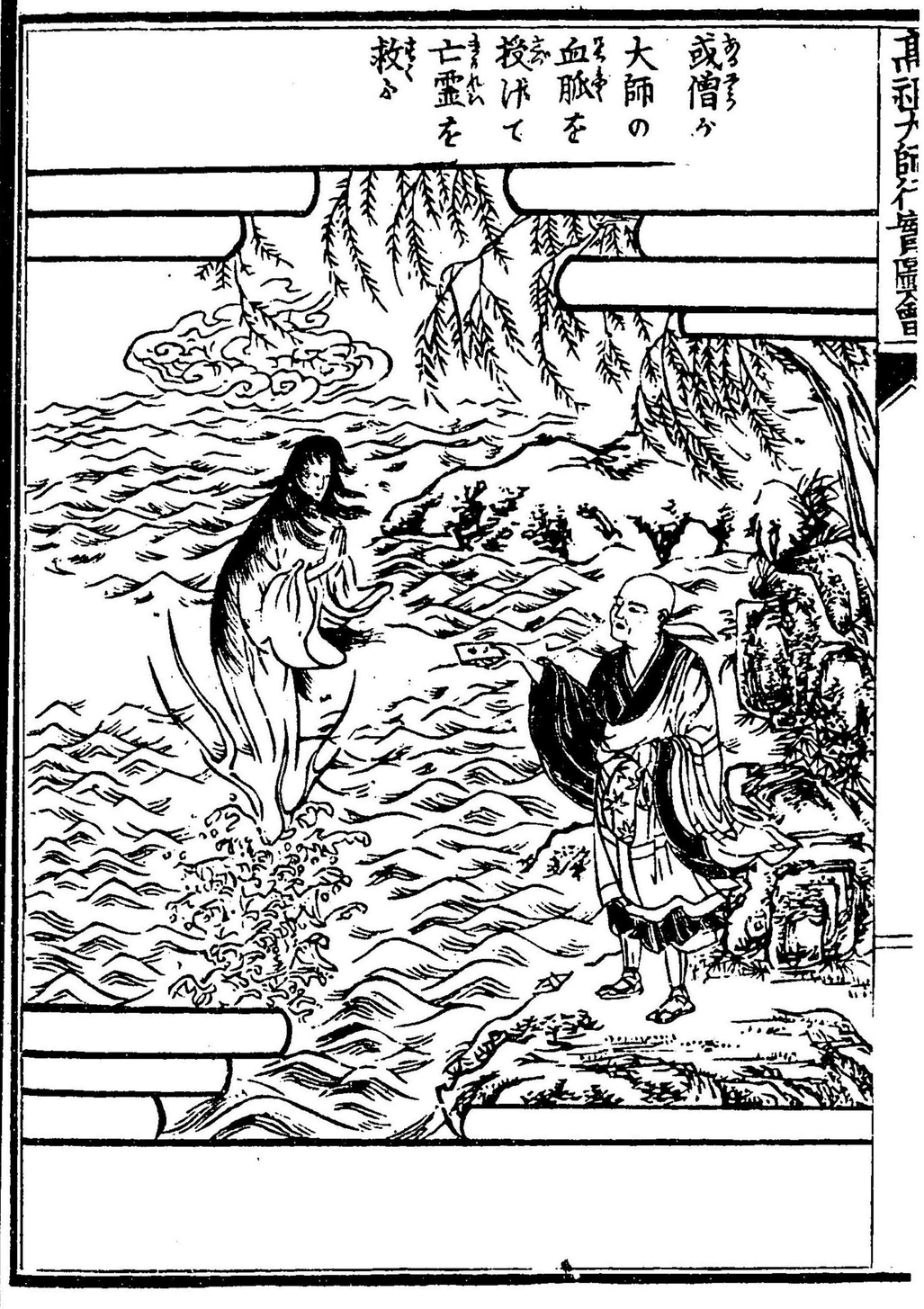
大師の御道德ますゝ顯はたまふ事

斯て大師にハ興聖寺に在して御化導あらせらるゝこと既に十年にも及びけれど出家在家の別なく參玄の徒れ皈趨せること市の如し中に就き淨土宗の三祖鎌倉光明寺の開山記主禪師良忠上人京都九品寺の覺明上人臨濟宗の由良興國寺の開山法燈國師等は其名の尤とも著はたる人々あり且つ縁に隨ひて御法談等に請せられたまひし大家も既に一百餘所に及び親しく菩薩戒を受けし御弟子ハ二千有餘人とぞさはれど御一代の内に教示したまへる學道用心集普勸坐禪儀を始め正法眼藏の百卷も其の過半は興聖寺にて述たまひけりとなん

佛祖正傳の血脈を以て遥に亡靈の冥苦を救はせたまふ事

爰に波多野出雲守藤原義重と云へる人は大織冠鎌足公の遠裔にて田原藤太秀郷より十八代の孫なれど鎌倉將軍家の御内にて弓馬に名高き人なるが初め其の知行所なる越前の國にて一妾を召されけるが其の容貌至て美しけれバ常に左右に侍らしめて

愛せられるを夫人は心の内にて之を惡むこと甚しけれども如何ともすること能はず或年義重には上命を奉て京都へ上られるが妾を連行ことも成り難ければ別に一室をしつらへて此に置きたり是に於て夫人は殿の留主を幸として親しき家頼に申し含め密に山中の深き池に沉めて殺さしめたり妾深く恨みを懷て死せしかば其の亡魂迷ひ出て往々叫喚ある恨めしき聲此聞へられば其の恐しさ寒毛卓竪ばかりなり斯て或日の夕暮に行脚の僧あり菴地を尋て其の近傍に至り路を村民に問ひけるに村民の申す樣は近日此邊には妖怪出て往來だにも絶たれば早く他の處へ去りたまへと告ければ僧の云く我れ忝なくも佛道修行の身にしめれば其の妖怪いかなるものか驗見んとて夫より直に彼の深池の傍なる老樹の下に到て靜に坐禪せられけるが最早夜半ともおぼしき頃に成ぬれば俄に怪しき風吹起りて池中大に波立つかと見へしが髮を被たる一女忽ち水面に現れ出で頓て僧の前に來り跪ひて泣き悲めり僧これに向て汝は是れ何人ぞと問へば妾は是れ波多野殿に事へし女なり夫人の爲に此の池に



沉められたれど其の欝憤ははやらず且つ弔祭も至らざるを以て未だ浮ぶこと能はず願くハ此事を殿に告て我が爲に冥福を修せしめたまへとぞ申しける僧こはを聞てあるゝ汝が願ふ所ハ尤あはど何ありと其の證あけはず波多野殿いかでか之を信ドたまはんと云ひ乃はず女その片袖を解はなして僧に與て形はそのまゝ消失乃り僧遂に京都に上て波多野の宅に到り具に右の次第を述べ彼の袖を出して其の證としけはバ義重大に驚き茫然として心安からず僧こはを愍ミ義重を伴ひて深艸に到り救濟

を大師に乞ひ給ひ大師乃ち一物を與へたまひて宣ふには此ハ是れ佛祖正傳菩薩戒の血脉あり之を獲たる者は必ず佛果菩提を成ず我今ことを以て亡靈の爲にするありと仰せられ其の僧それより急ぎ越前に還て其の御血脉を池中に投入るに亡靈これを受しと見へ空中より遂に告て云く我今無上の妙法を得て頓に幽冥の苦を脱れ疾かに菩提の妙果を成ぜし事の難有さよと云へる聲ありしと聞へければ遠近ことを聞て感ぜぬ者ぞなかりける義重大に喜び深く大師に皈依せられるとなん此の池を後に血脉池と称して今にあり

波多野出雲守の招請に赴きたまふ事

さきだ仁治三年の十二月十七日波多野義重の招請に應じ其の宅へ赴かせたまひて難有き御説法などありけるが扨義重謹んで大師に白されけるは越前國吉田郡の山奥に最と清閑なる古寺あり彼の地は幸ひ我が知行所の内なれば之を再興して寄附し奉りたき旨を申上られければ大師の御答に吾が師匠なる天童山の如淨禪師ハ宋土にて越州と云へる處の御方なれば今や越と云ふ名を聞だにも懐しけれ

波多野雲州の請に赴きたまひて御説法あり

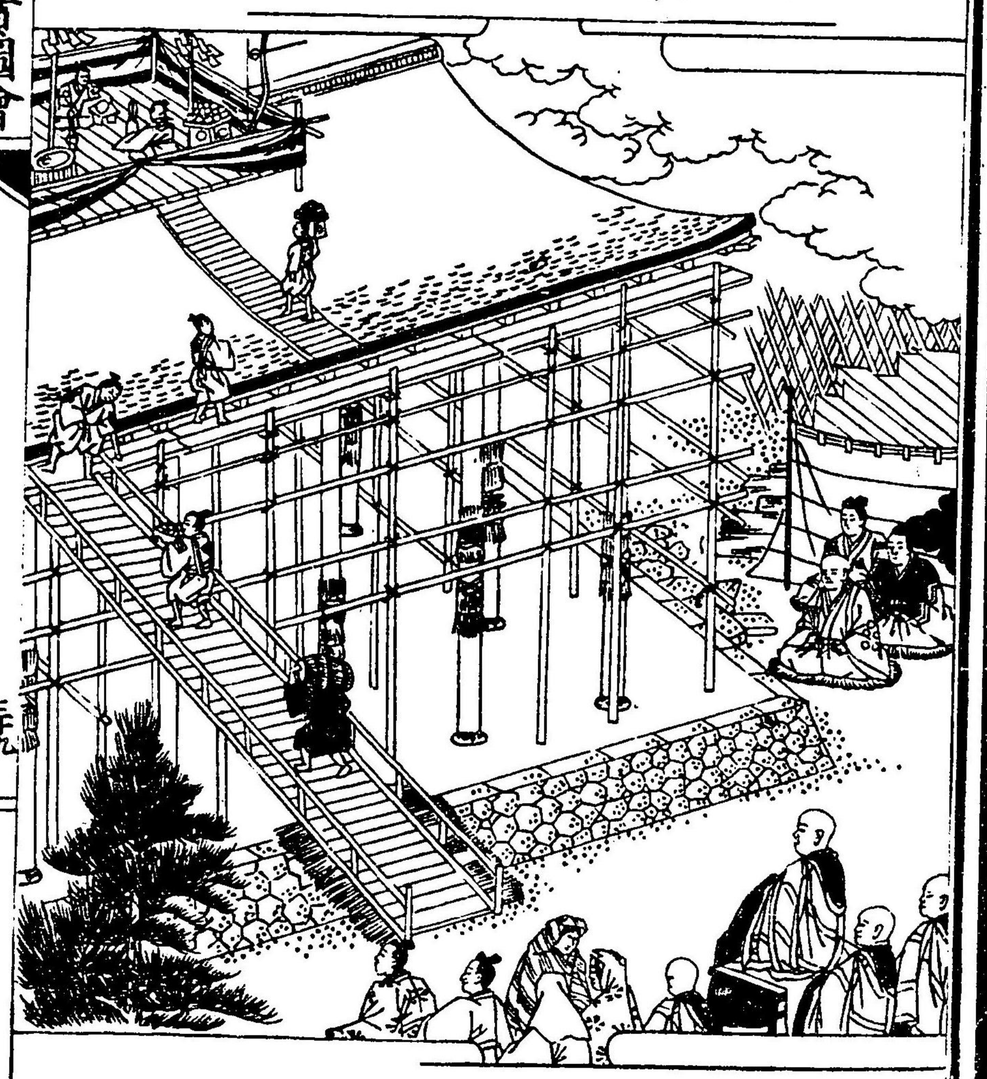
を幸ひ我が望む所の境地なりと御返答あらせられたり是より先大師兼て思召す様は此の深草の邊は皇城に近ふして月卿雲客花族車馬の往來たへば度生の方便は佛祖の古風なれども我ハ清閑の地を望むなりと且つ先師天童古佛の御付囑にも城邑聚落に住する莫れ國王大臣に近く莫れ只深山幽谷に居して一箇半箇を接得せよとの御教示も受させられたまで常に山林泉石の便宜を求めたまひしに追々御皈依の信徒より幽邃なる山林園地を寄附しまいらせんと申出るも是まで既に十二箇所に及びたま

ども何れも未だ大師の御意に適はせらるゝざるが今越州の山奥と聞たまひて大に喜ばせたまひ乃り

越前國に赴たまひて永平寺を御開創ありし事

扨その翌歳寛元元年は大師四十四歳に成らせたまふが七月十六日に深草を立せたまひて遥に越前の國に赴きたまひ先づ初には松岡の溪の奥なる吉峯と云へる處に住せらるゝが其後禪師峰と云へる處に移寓たまへりさるを此程大師に於ては所々幾回も御移轉の砌でもら尚ほ一日とても人天の爲に御教示を怠らせたまはず其は彼の正法眼藏の奥書等

を拜覽しても知らきたり況んや平生の御辛勞察し奉るに亦た餘りあり爰に又た左金吾禪門覺念（眞柄備中守同左馬助等の先祖也）と云へる護法の人あり深く大師に皈依せらきれば波多野雲州義重と共に力を戮せ速に伽藍を建立せんと思ひ則ち市野山の東傘松の西に於て寺院に相應しき淨地を選び其年の閏七月十七日に地平を始めらきたるが波多野等の人々御皈依の餘り自ら山を平げ石を拽るどせらきしとぞ其翌寛元二年四月廿一日に法堂の柱立あり次日に上棟の儀式を行はせらきたり七月十八日に開堂の法式


法堂上梁の儀式
初は大佛寺と號し
後に永平寺と改めたまふ

あり初ハ傘松峯大佛寺と名けたまひしが後に吉祥山永平寺とぞ改めたまひける追々諸堂も全備して一に天童山の伽藍を以て規模とあしたまひけり

天花彩雲等の奇瑞を感ぜさせたまふ事

寛元三年乙巳の四月結夏の日に上堂の法式を行はせたまひしに天花多く降りて法席を申はまでもなく衆僧の座の上や茶盞の中にまでも散入りしうぞ參詣の人々も皆ことを見て感ぜぬ者ぞなかりける斯る瑞相を格別に高徳なる御方の御法を説せらるる時に諸天より供養し奉る所の花ありとて昔より

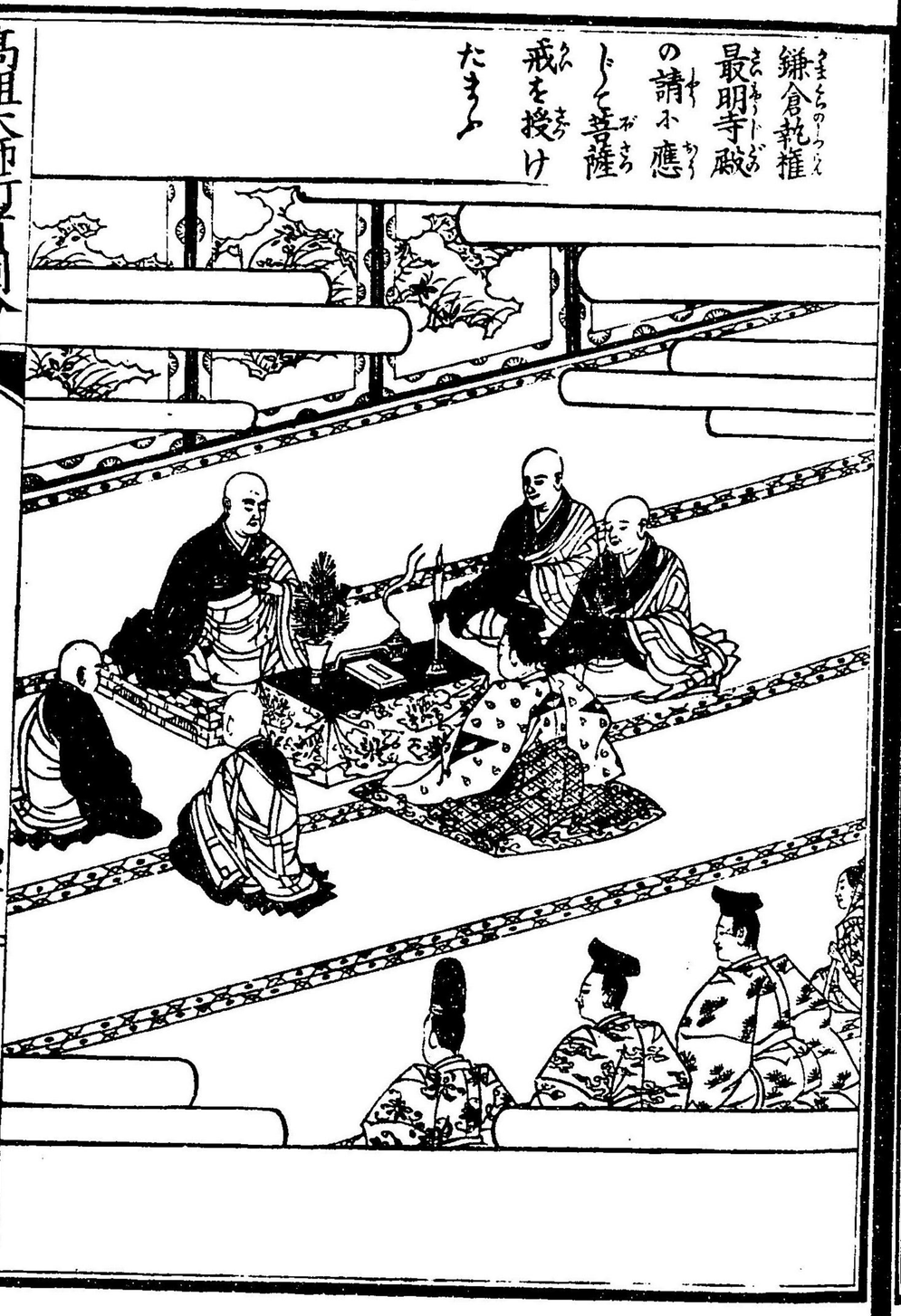
稀にも其の例ある事と申傳へ候り又同暦五年丁未の正月十五日に布薩を行ひ衆の爲に説戒したまへる時に五色の彩まる雲たなびきて正面の障子にうつらふて未の刻の始より申の刻の半に至る參詣の貴賤こまを拜見して其の未曾有なる事を感心してまほしく大師の高徳に懐き奉り候るとぞ

鎌倉府の懇請に赴きたまふ事

付寺禄等をも堅く辭したまふ事

夫れ石玉を蘊で其山輝き水珠を懐てその流れ芳しとうや今ま大師も深く跡を晦まして深山幽谷の中

ふ隠まさせたまへども其の芳名ますます世ふ顯れ
またまひて都鄙の貴賤渇仰せぬ者ぞあらざる
れを寶治元年二月廿八日ふ改元鎌倉の執權副元帥北條
時頼より頻ふ大師を御請待せられたき旨申越まけ
まゐば八月三日に鎌倉へ御下向あり時頼大ふ喜び請
て菩薩戒を受け常ふ弟子の禮を執て朝暮參問せら
まゐり府中の官寓遠近より士庶來り謁して化を蒙り
戒を受る者亦た幾千人と云ふ數を知らず或時時頼
の請によりて十首の題詠を示したまへり茲ふ其の
一一二を擧んふ教外別傳の旨を荒磯の波もえよせぬ



鎌倉執權最明寺殿の請ふ應じて菩薩戒を授けたまふ

高岩にかきもつくべき法あらばこれ」不立文字をいひ捨しその言のもれ外あれば筆にも跡をとゞめざりけり」本來面目を春は花夏はしゞぎは秋は月冬雪さえて冷しかりけり」應無所住而生其心の意を水鳥のゆくもうへるも跡たえてさもども道はわもはざりけり」とあど懇に教示したまひけり斯て大師は翌年の春まで鎌倉に寓止らせたまひしが時頼は永く師とし事へ奉りたく思はれ新に大伽藍を建て今の建長寺是あり大師を請せんと願はれけれども大師には鎌倉の如き都めきたる處を好ませらはざれば堅く之を

辭したまひ乃ち三月十三日に永平寺に皈らせたまひけり時頼頻りに別を惜ミ奉り越前國の六條と云へる所にて永平寺へ寺領二千石を寄附ありけれども遂に之をも受けたまはず玄明首座と云へる僧が其の寄進狀を持來りて嬉しげに衆中に觸れけるをば大師ひそかに聞たまひて如何にも穢き心ありとて即時に寺を擯出し常に玄明が坐禪せし牀までも截取り其下七尺ほどの土をも取除させたまひけりとあん嗚呼我が宗祖大師の斯までも世間の名利を捨させたまへること古聖先賢と雖ども類例

稀なる御事なり尊むべし仰ぐべし

羅漢供を御執行ありしが尊者わの〳〵現ませ

たまふ事

寶治三年正月元日に羅漢供養の法會を行ませたま

ひしに木像繪像の羅漢尊者が皆悉く光を放て堂の

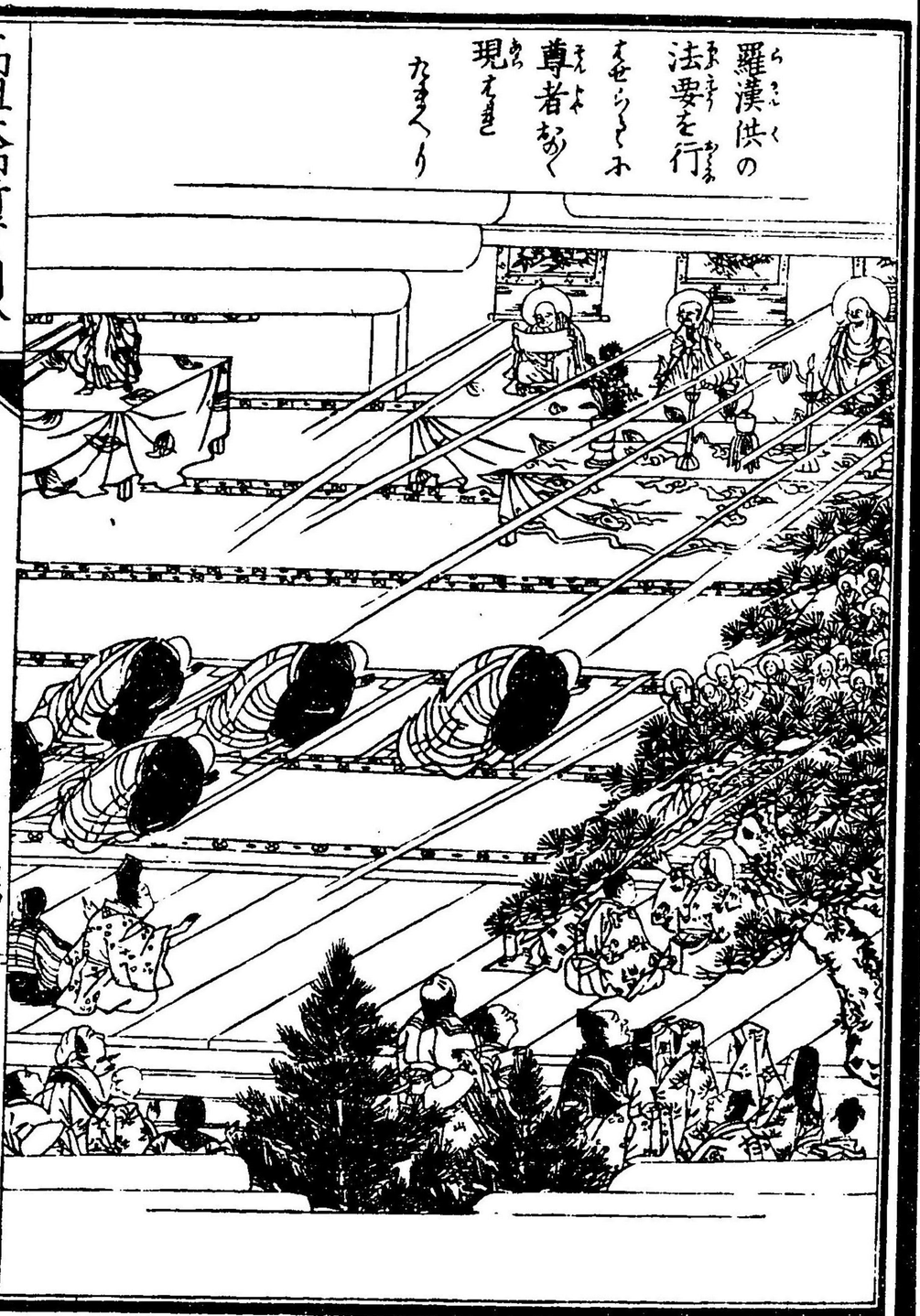
内を照し親しく供養を受たまへり又た寺の東岩の

松の上に十六羅漢諸の眷屬と共にあり〳〵と現ま

たまひ乃ませ人々皆な拜み奉りて信心肝に銘じけ

り其の松を後に羅漢松とぞ號ける又その現ませた

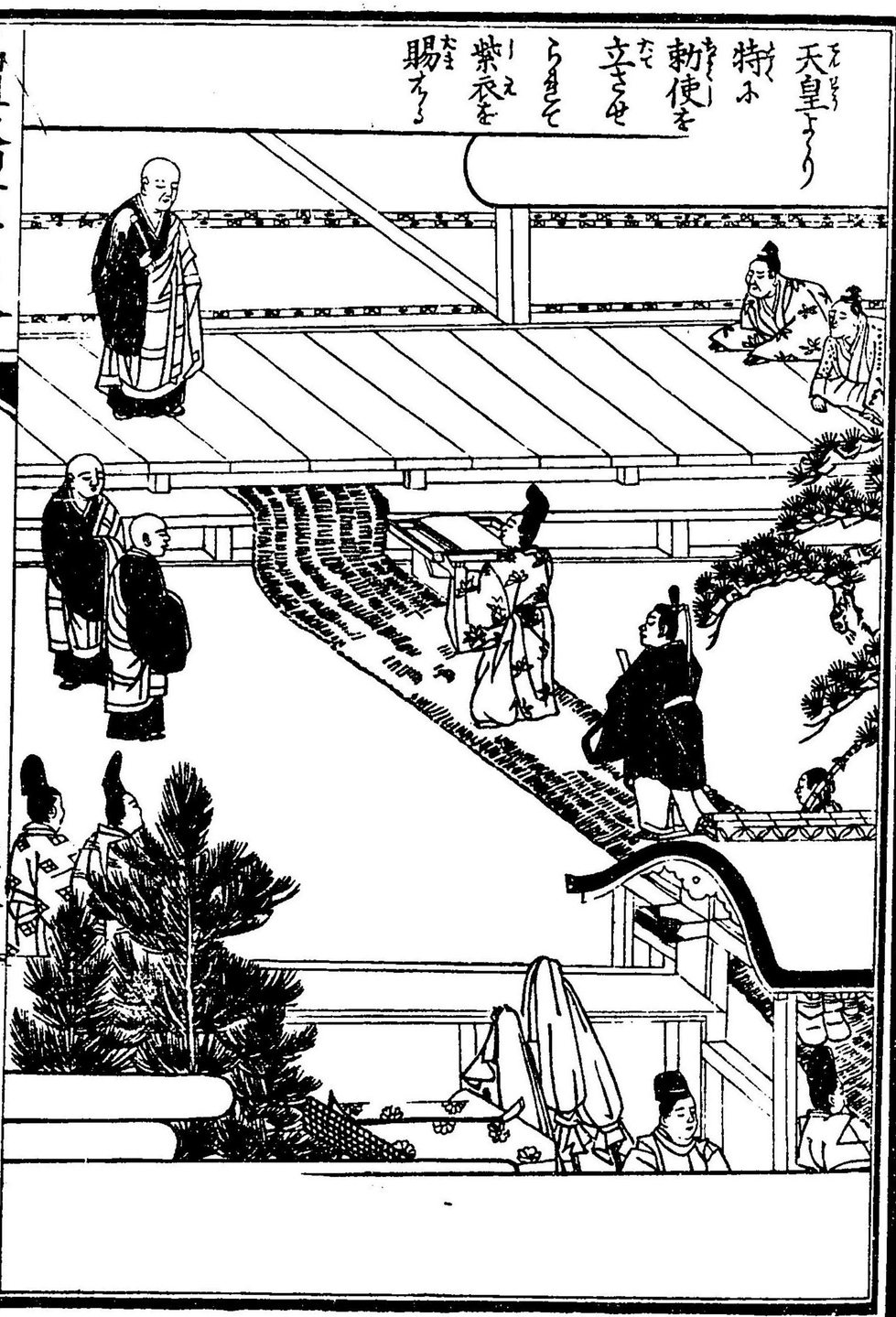
まひし時に異樣の團扇を遺しありしを今に於て室



中に傳秘せりさまを昔し震旦天台山の石橋に現れ
またまひし其後を復た曾て聞及ばざる希有の靈感
あり○因に記す大師在宋の御時老僧の指揮により
て天童山如淨禪師へ參見したまへり是れ羅漢の
應現ありとぞ故に御皈朝の後屢々羅漢尊者を供
養したまへり今ま吾が宗に執行する所の羅漢講
式を蓋し大師の所撰ありと云へり

朝廷より特に勅使を立させらまて紫衣を賜ま
る事

斯て大師の御道德ますゝ高く聞へしかばいつしか



雲井の上にも達せし御事にや後嵯峨天皇より勅使を以て紫衣を賜はりしを大師再三御辭退ありしかども許したまはざりしきが已ことを獲ずして之を受て謝し奉りたまひしるに永平雖谷淺。勅命重重々。却被猿鶴笑紫衣一老翁と云へる一偈を賦して獻じたまひしきが天皇こゝを見そなはしてますし稱歎したまひしり扨大師にも御生涯つひに其の紫衣を召させたまはざりしとぞ

御病中に八大人覺を教示したまふ事

つら〳〵金口の直說を窺ひ奉るに若し佛いつまでも世に住したまはゞ薄德の衆生は善根を種ばたゞ五欲にのみ貪著して妄想邪見の綱の中に入るべし若し如來は常住不滅ありと見ばその心をなはち怠て難遭の想ひ恭敬の心を生ずること能はず若し衆生が世の無常を觀じて諸佛の出世にも遇ひ難きとの想ひが生るときは心に佛を渴仰して便ち善根を種べしとあん承はるさまは應化の御方便いづれか生滅去來無常遷流の理を示したまはざる事を得んや爰に建長四年大師の御齡五十三歲にあらせたまふが其年の夏の頃より聊か疾の兆し見へさせたまへ

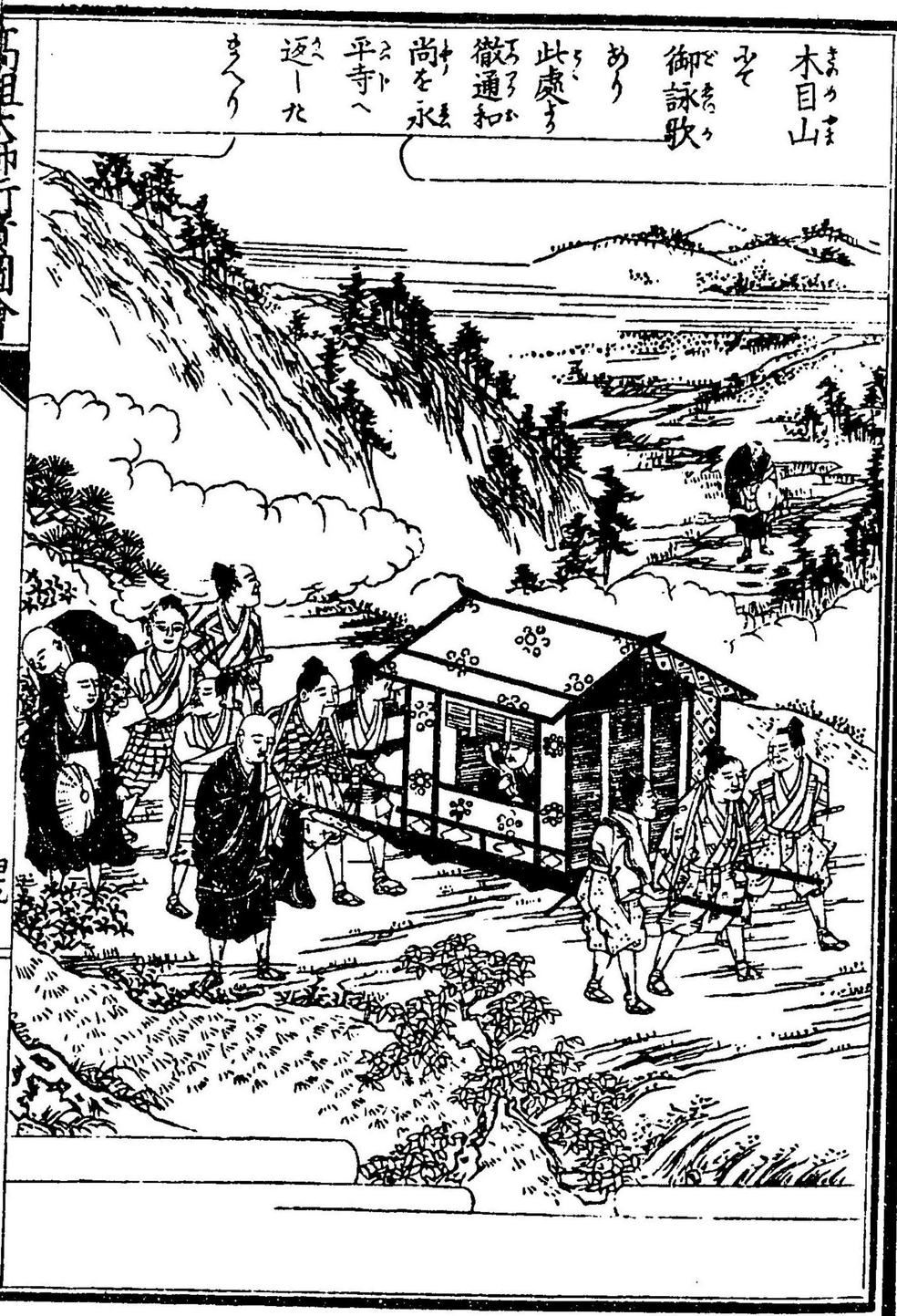
を最後の教化にと思召さま釋迦牟尼如來の御臨終に説せたまひたる遺教經に本きて八大人覺と云へる法門を述させたまひ乃り今ま初學の爲に聊か其の大意を記さん一にを少欲この意ハ若し人多く名利を求るときを苦惱も亦た隨て多し無欲あるときを患ひ無しして諸の功德自ら生ずるあり二にハ知足この意ハ世間の苦惱を脱んと思ハヾ常に足ることを知て我より上を望むこと莫れたゞ人々我身の分限を思へバ何事も足らぬといふこと無きあり三にを樂寂靜ときハ世間の憤鬧を離まて深く山林に閑

居ませば諸天にも諸人にも敬ひ重ぜらるゝあり四には勤精進こまハ諸の善法を勤行ひて間断なきとまハ求る事が皆な満足するあり五には不忘念亦は守正念と名く法を守て失はざる名けて正念とは若し此の不忘念あるときハ諸の煩悩の賊も入來らざるなり六にハ修禪定これハ法に住して心みだまざる名けて禪定と云ふこの禪定を修するときは自ら世間の無常の道理を得るあり七には修智慧こまハ若し人智慧あまば一切の物に貪著することあし能く教の如くせまバ暗夜に燈を得たるが如くなり八にハ不戯論こは實相を究盡する乃ち不戯論あり総て何邊にも戯れ論ずること莫れ戯論するときは其の心亂るゝゆへに只死せ居きことを思へとあり此此八大人覺の理を知らざるハ佛弟子にあらずと仰せられたり又孤雲禪師の奥書にも此れ釋尊最後の教勅且つ先師最後の遺教ありと宣へりさまば古へより此の巻を拜見する輩は感涙を催し此の巻を談ずる時は聲を擧て泣きたるとあん申傳へたり末代に於て此の御遺言を守らば宗風永く扇ぎ門派流通して退轉せべからずと云へり苟もその流れを酌む

もの誰か其を感泣して信受奉行せざらんや

御療治の爲に京都へ上りたまふ事

其の翌歳建長五年に至ても更に御平愈の驗し見へさせたまはざるを七月十四日に永平寺を孤雲禪師に讓らせたまひ八月五日に京都へぞ上りたまひける其ハ波多野出雲守を始め皈崇の人々より御病氣の由を聞て御療治の便宜を京都とそ然るべけをとて頻りに勸め奉るに由て遂に思召し立せたまひしとあんさるバ孤雲禪師等の御弟子方も伴なはせたまひしが徹通和尚をば御山監護の爲にとて木目山

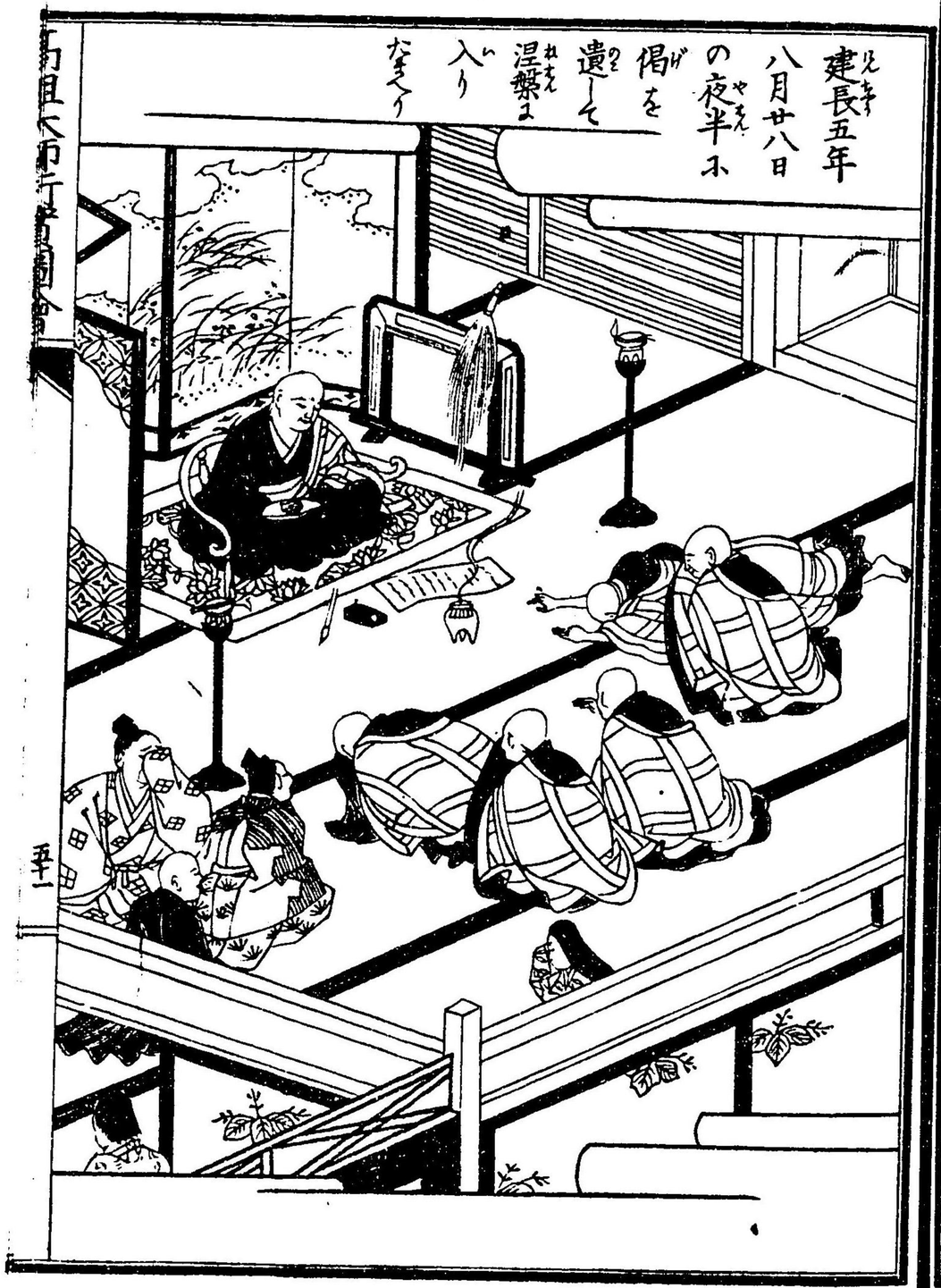


より永平寺へ還したまひ乃り其時の御歌に草の葉に門出せる身此木のめやま雲に路ある心地こそすまと詠せたまへば御伴の人々こまも早や御遺言にやと思ひて皆々涙にぞ咽ばまる扨それより御入洛ありて高辻西洞院の俗弟子覺念が宅に宿したまひしかば太上天皇こまを聞せたまひて御醫師に仰せらまて診察せしめたまひ乃る叡慮のほどこそ難有けれ斯て大師或日の事に室内を經行せたまひつつ若於園中若於林中若於樹下若於僧房若白衣舎乃至當知是處即是道場乃至諸佛於此轉於法輪諸佛於此而

般涅槃といへる法華經の文句を低聲に唱へさせたまひやがて又此の文を面前の柱に書付たまひけり此まハ我れ追て此の俗家の白衣舍に於て涅槃に入る僧きが昔の諸佛も亦た斯の如くあらせたまひしとの御意ありと我

御入滅の事

斯て其月即ち建長五年八月なり廿八日の子の刻即ち夜半なり に至り五十四年。照第一天。打箇踍跳。觸破大千。咦。渾身無著處活陷黃泉。と云へる偈を書たまひ五十四歳を一期とおさせられ遂に御入寂あらせたまひしが波多野



出雲守義重は天に仰ぎ地に伏して御早逝をぞ深く惜まれける其外覺念を始め在家出家の御弟子たち皆々悲嘆の聲に咽ばきけり其の中にも孤雲禪師は半時ばかり氣絶したまひしと拵扨今は最早ある所きことに非ざきを御遺骸を東山に移し奉り赤築地と云へる處にて法の如く火葬の式を行はせらき九月六日に御舍利を收めて京を出で同月十日に永平寺に著したまへり十二日に入般涅槃の儀式を行はせられ如法慇懃に供養を營み法事勤行すべて在せが如くに至誠の孝禮を盡して本山の西北の隅に葬

承陽菴祖塔の畧図

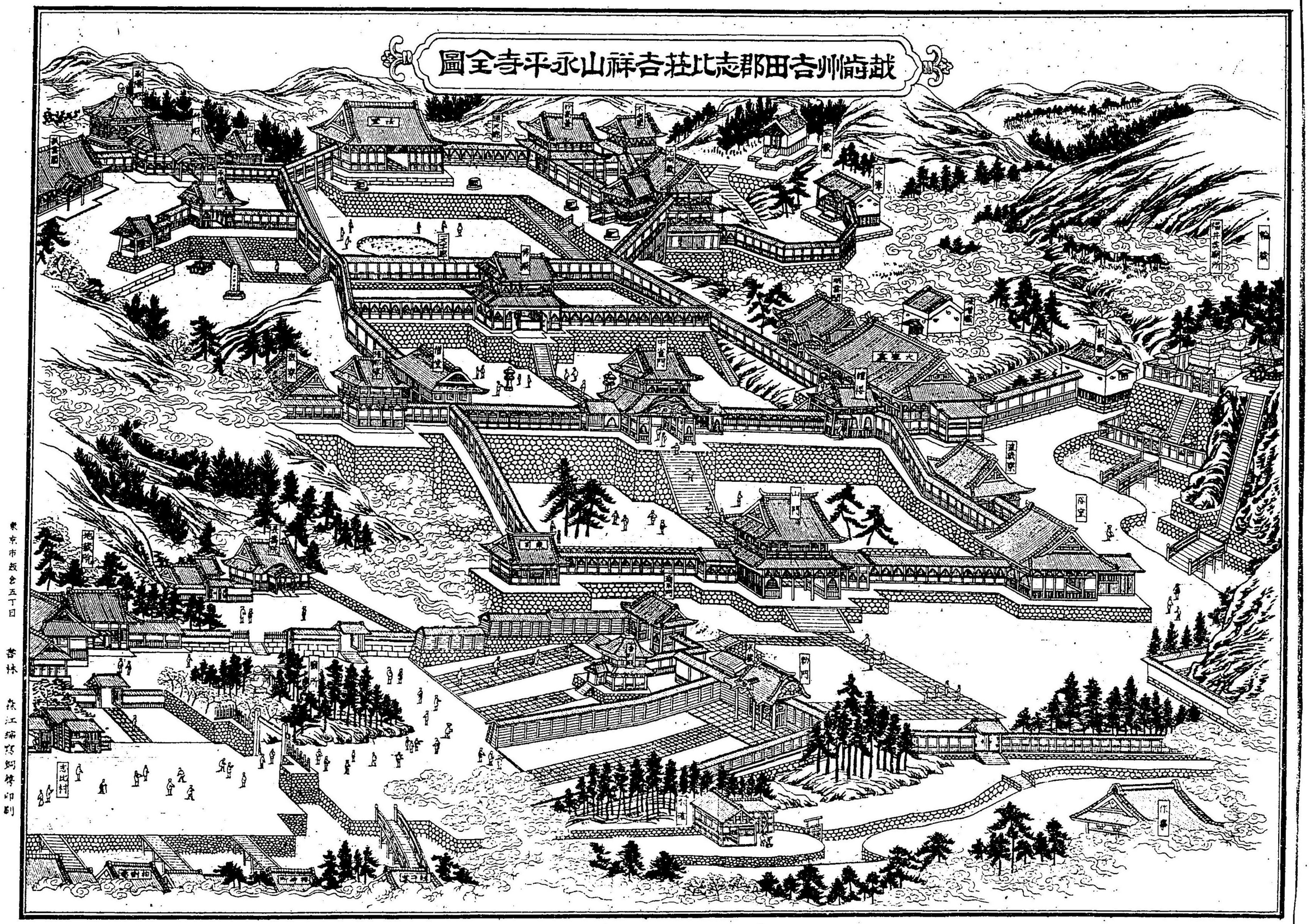
り奉り御廟を承陽菴と名け孤雲禪師を其の側ふ菴を結び自ら朝夕の供養ふ給仕りたまひて報恩謝徳の真心をぞ盡さゝりる

御諡號の事

叡大師御入滅の後御法孫の人々まゐり繁昌し特ふ第四代ふ當らせたまふ太祖圓明國師の出させたまひてより其の御流れ日々ふ廣く遂ふ全國八十餘州ふ弥漫するふ至りしかを御高徳いよ〳〵顯はれたまひ嘉永五年壬子の八月を正ふ六百回の御遠忌に當らせたまくバ先帝光孝明天皇より佛性傳東國

師と云へる諡號を賜ひ更に明治十二年の十一月に至り今上天皇より承陽大師とぞ諡號したまひ居るさまで佛日の光り皇威と共に永く四海に耀くを實に尊くも亦た有がたき次第ありけり

高祖承陽大師行實圖會終


越前州吉田郡志比莊吉祥山永平寺全圖

東京市飯倉五丁目
書林　森江綿寫銅彎印刷

明治廿六年九月廿四日印刷
明治廿六年九月廿[illegible]日発行

版權所有

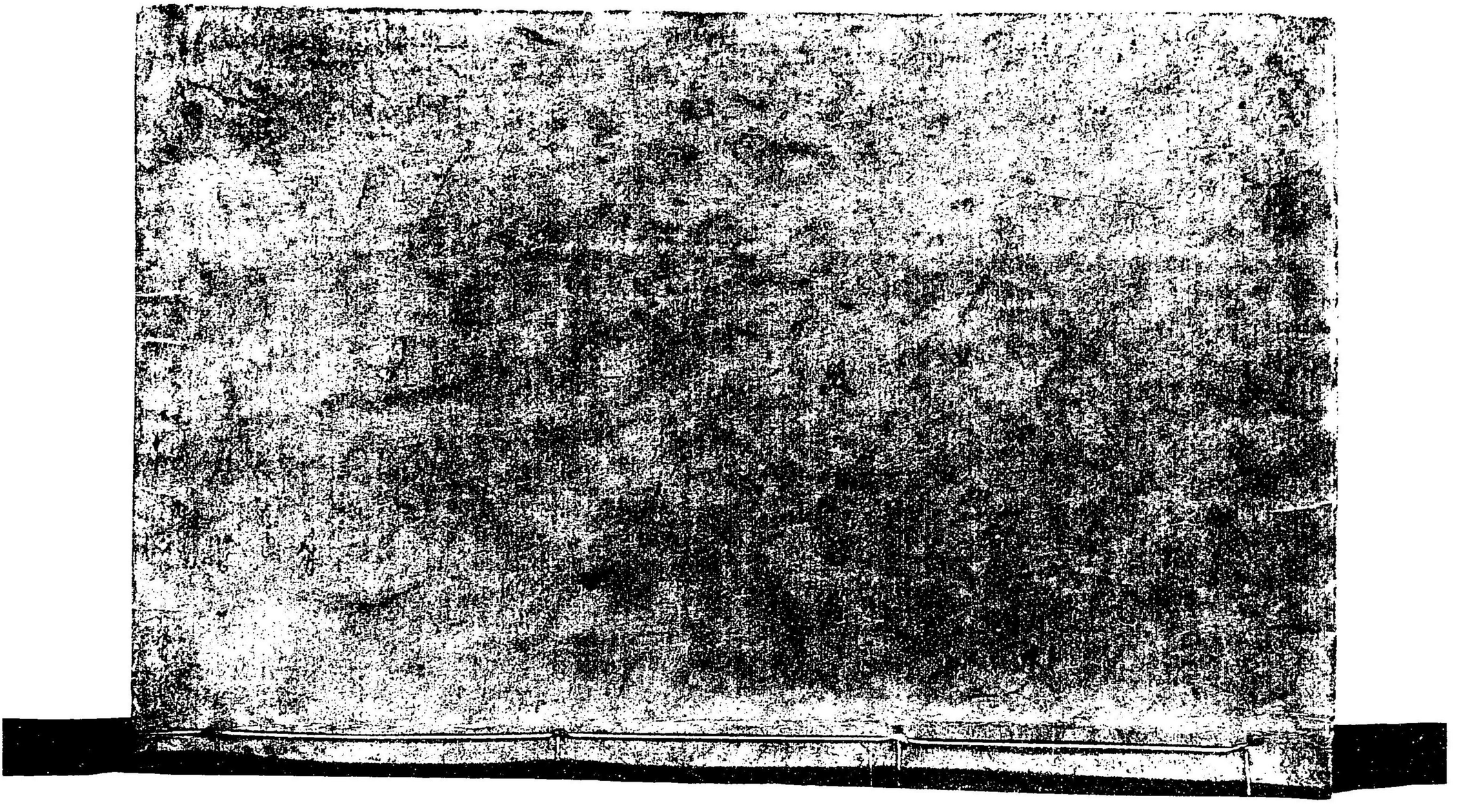
著作者　福岡縣平民　寶山梵成　筑前國博多市上東町十六番地　明光寺前住職

定價金貳拾錢

發行兼印刷者　東京府平民　森江佐七　麻布區仙倉町五丁目四十六番地

發行所　森江商店　四區同町四十四番地

畫工　松下尚悅

彫工　市川鎌次郎

版權登錄